

WASEDA bungaku FreePaper

vol.022_2011_spring

わからん?!文学

Wonderful BUNGAKU

赤染晶子

蓮實重彦+川上未映子

岸本佐知子+都甲幸治

高橋美奈子

木下古栗→久生十蘭

西田亮介

玉川重機

キョウミナヲ

青木淳悟

望月旬々

円城塔

江南亜美子

大澤真幸

砂野幸稔



難破

〔短篇小説〕

赤染晶子

わたしは路地の真ん中でヤンキー座りをして、野菜を洗っていた。わたしの家は大衆食堂を営んでいる。明日の準備をしていた。

「えっちゃん！ のいてー！」

後ろから車が来る。百合子議員だ。クラクションを鳴らされる。今日は店の営業が終わってから、後援会の話し合いが行われる。商店街の人達が店に集まっていた。商店街ではある政党の後援会を作っている。来月には市議会議員の選挙がある。

「困りましたな」

会長が溜息をつく。百合子議員のことだ。選挙を前に不倫スキャンダルが浮上した。まだ噂の段階だった。「きつねうどん」

¥0

Photo 迫川尚子
Model 牧瀬茜

百合子議員はカウンター席に座る。一瞬、店内が静まり返る。

「そういうこととちゃうやろ！」

百合子議員に非難が飛ぶ。

「どういふつもりで議員バツつけてんねん！」

「名声」

全員、啞然とする。百合子議員はしゃあしやあとと言う。

「女がひとり生きていこう思うたら、この道しかあらへんの」

「公私混同じゃ」

「何があかんのよ」

「あかん！」

皆は怒って帰ってしまった。わたしは洗ったばかりのネギを抱きしめていた。あの噂は本当だろうか。わたしはまだ高校生だった。噂はあまりに生々しかった。

「きつねうどん！」

「はい……」

父がおそろおそろきつねうどんを出す。百合子議員はきつねうどんを食べる。絶対にきつねうどんしか食べない。百合子議員はうどんを一本ずつちゅるちゅる食べる。ものすごい時間がかかる。もしかしたら、うどんの本数を数えているのだからかとわたしは時々思う。店中におかしな音が響き渡る。ちゅるちゅる、ちゅるちゅる……。何やら不思議な生き物みたいだ。

「えっちゃん、お茶」

わたしはやかんを取って来る。

「そのやかん、ぼこぼこやないの」

わたしが生まれる前からあるやかんだった。とても大きいやかんである。野球部のマネージャーが使っているやかんよりもまだ大きかった。わたしはいつもこのやかんでお客さんにお茶をついで回る。

「えっちゃん、わたしのこと信じてね」

信じられなかった。

「ね！」

「……はい」

仕方なく返事をした。わたしは百合子議員に恩があった。通学のために市役所の駐輪場を使わせてもらっていた。本当なら市役所に用事もない人間が使うことはできない。百合子議員が市役所の管財課に口利きしてくれたのだ。商店街の票集めの見返りだった。

「えっちゃん、三者面談どうやった？」

痛いところを突かれた。わたしは進学が危うかった。

いつもなら、百合子議員が学校に圧力をかけてくれる。この党の市議会議員はそれほど力があつた。

「それが……」

わたしは言葉を濁した。

「今回は百合子議員は通用しませんよ！」

わたしは先生に怒られた。わたしが不倫をしたみたいだった。迷惑な話だ。わたしの進学は今度の英語の追試にかかっている。

「何、それ。わたしのこと、あほにしてるわ」

百合子議員が唇を噛む。この人は市議会議員の仕事というものをあまり理解していない。

「えっちゃん、英語の勉強しよう」

「え？」

わたしはすっかり進学をあきらめていた。進学できなくても、わたしにはこの店がある。

「えっちゃん！ 英語の勉強、するんよ！」

わたしは百合子議員の勢いに呆気にとられた。

「なんでですか……」

「わたしのプライド」

百合子議員が真顔で言った。

「これまで通り、えっちゃんにはちゃんと進学してもらいます」

百合子議員は大人の支持者にするみたいにわたしに頭を下げた。

「お願いします」

「はい……」

わたしは思わず返事をしてしまった。こんな風に大人に頭を下げられるのは初めてだった。それも誰よりもプライドの高い百合子議員だ。百合子議員はうどんを残した。珍しいことだった。どんぶりの中でうどんが数本取り残された。

その日からわたしは百合子議員と猛勉強をした。店が終わる時間に百合子議員が来てくれた。わたし達はカウンターに並んで座った。百合子議員はとてもヒステリーだった。

「関係副詞と関係代名詞はちゃうんよ！」

しょっちゅう痲癩を起す。どん、と拳でカウンターを叩く。衝撃で厨房にあったやかんがものすごい音を立てて床に落ちる。ますますあちこちへこんだ。

「負けたらあかんのよ！」

百合子議員の口癖だった。百合子議員は毎日遅くまで勉強を教えてくれた。

ある日、勉強が終わった後、百合子議員が忘れ物をした。傘だった。ぽつぽつと雨が降り出した。わたしは駅まで傘を届けに行った。駅の近くまで来て、わたしは「ひゃあ！」と声を出してしまった。百合子議員が男の人とキスをしていた。男の人の大きい傘に入ってぴたりと身を寄せていた。男の人の顔はよく見えなかった。百合子議員の顔だけが街灯の明かりにくっきりと照らし出されていた。わたしは百合子議員と目があつた。わたしは走って逃げた。噂は本当だった。見てはいけないものを見てしまった。

「待ちい！」

百合子議員は走ってわたしを追いかけた。わたし

の腕をつかんだ。

「誰にも言わんといて」

百合子議員は真剣な顔をしていた。髪の毛が乱れていた。口紅が唇からはみ出ていた。何かを屠ったあとの獣みだいだった。百合子議員の本当の姿を見た気がした。こんな人がきつねうどんで満足するはずがない。あれはやっぱりうどんの本数を数えていたのだ。

「これ、あげる」

百合子議員は財布から一万円札を出した。わたしは受け取った。よれよれの一万円札だった。

百合子議員は次の選挙に立候補しなかった。百合子議員を取り巻く状況は次第に悪くなった。わたしはほかに不倫現場の目撃者が複数現れたのだ。わたしは市役所の駐輪場を使えなくなった。わたしは歩いて学校に通うはめになった。毎晩、百合子議員はわたしの店に来た。「プライドやよ」

わたしの追試の日が迫っていた。その日も百合子議員はとても熱心だった。急に百合子議員がくしゃみをした。「えらい冷えてるねえ」

わたしはやかんに残っていたお茶を火にかけた。一日の営業が終わってすっかり冷えて残ったお茶だった。改めて火にかけたほうじ茶は少し苦くなる。

「わたし、こっちの方が好きやよ」

百合子議員は「ずずずとお茶を飲む」

「えっちゃんで、やかん似合うね」

洋服が似合うみたいに百合子議員は言う。

「それ、えっちゃんのシンボルやね」

「そうですか？」

よく意味がわからなかった。ただの古いやかんだった。「えっちゃん。わたしね、駆け落ちするんよ」

驚いて、やかんを落としてしまった。床がお茶で黒く

濡れた。

「あかんやん」

百合子議員が拾ってくれた。やかんをカウンターに置いた。床は濡れたままだった。これがこの人が好きと言った飲んでいたものかとわたしは黒い染みをじつと見た。「わたし、こんなバッジおしいことあらへんの」

百合子議員はバッジを外した。やかんの隣に置いた。大きなやかんの隣で議員バッジはあまりに小さかった。

「ほんまに好きな人やの。その人ね、すごいお金持ちやの」

「お金目当てですか」

わたしはまだあの日のよれよれの一万円札を持っていた。

「ちゃう。指輪ほしいの」

百合子議員は左手の薬指をさすった。

「子供の頃からの夢やの。えっちゃんも女の子やからわかるでしょう？」

わからなかった。わたしはもう高校生だ。

「『ひくまあ』『ひくまあ』でいひひいます。』さくま、た」

選挙運動期間が始まっていた。他の候補が名前を連呼する声が町中に響いていた。

「やかましいね」

百合子議員が言う。

「わたし、あんなこと長いことようやってたわ。あほみたい」

百合子議員が頬杖をつく。じつとやかんを見つめる。何のへんてつもないただのやかんだった。わたしはこんなものが自分のシンボルになるとは思えなかった。やかんはやかんだった。それ以上の意味はなかった。

「これ、ちょうだい！」

急に百合子議員がやかんを持って店を飛び出してしま

った。

「ちょ、ちょっと……」

止める間もなかった。やかんを持って全速力で走っていく人を、わたしは生まれて初めて見た。あんな古いやかんをどうするつもりだろう。わたしはとも百合子議員を追いかける気にならなかった。わたしにはどうしてもあのやかんを取り戻したいという執念はなかった。店のカウンターに議員バッジが残された。百合子議員は簡単にこの小さなものを置いて行った。わたしはひとり英語の勉強の続をした。

翌朝、百合子議員が大きな包みを持ってお詫びに来た。

「ごめんなさい。出来心でした」

「別に、ええですけど……」

そんな大層なことではなかった。たかが古いやかんだった。大きな包みを開けてみると、ぴかぴかの新しいやかんが入っていた。

「ごめん。それで許してくれる？」

その日も営業日だった。店では早速そのやかんを使った。夕方の混雑時にはわたしは新しいやかんでお茶をついで回った。ちょうど同じサイズだったのに、なんだか使い勝手が違った。あんな古いやかんでもかけがえのないものだったとわたしは今更ながらに知った。

「なんちゅう、ぴかぴかのやかんや」

お客さんが感心していた。一日の営業が終わった後、カウンターにてんと置かれた新しいやかんはオブリジェに見えた。わたしが長年使っていたやかんがこんな簡単に新しいものと引き換えられたことが不思議だった。なんだか寂しかった。百合子議員はもつと寂しかった。小さい議員バッジは新しいやかんの隣で一層古く見えた。これはもうすぐ百合子議員の物ではなくなってしまう。こんな古くなるほど長く人になじんでも、物は人から離れてしまうのだ。

追試の日になった。一日の授業が終わってから、わたしだけ教室に残った。

「えっちゃん！ 頑張つてよー！」

窓の外からあほな声があった。百合子議員だった。勝手に校庭に入ってきていた。あの古いやかんを持っていた。やかんはからっぽだ。見ただけでわたしはすぐにわかった。あのやかんの目的は一体何だろう。少なくとも、百合子議員にはやかんが似合っていなかった。

「不法侵入ですよ！ 一一〇番しますよ！」

百合子議員は校長先生に叱られていた。あの不倫スキャンダル以来、町中の人が百合子議員の顔を覚えてしまった。

「しっ、しっ！」

百合子議員は野良犬みたいに校長先生に追い払われていた。追い払われながら、百合子議員は叫んだ。

「えっちゃん！ 試験用紙に名前書き忘れたらあかんよ！ 無効になるから！」

試験の出来は上々だった。百合子議員が圧力をかけなくとも、やればできるのだ。わたしは嬉しかった。すっかり日が暮れて、あたりは真っ暗だった。もう自転車に乗れないのでわたしは歩いて帰った。途中、道の向こうに駅のホームが見えた。ホームに入って来た電車の中だけが見えた。それは長い一枚の絵みだだった。その中に百合子議員がいた。膝の上にやかんを置いて座っていた。それはわたしのあの古いやかんだった。百合子議員は両腕でしっかりとやかんを抱きしめていた。やかんだけが百合子議員の大事なのみたひだった。それはとても奇妙な光景だった。そこは海で百合子議員はおぼれたところをこのやかんにしがみついているみだだった。一体、やかんを持ってどこへ行くのだろう。わたしは不思議に思った。

ふと、隣に座っていた男の人が百合子議員にハンカチか何かを差し出した。親しげだった。百合子議員は首を振って受け取らなかった。きつと泣いているのだ。わたしは直感した。駆け落ちだ。今日がその日なのだ。やかんなんか抱きしめているから気付かなかった。百合子議員の両隣りには男の乗客がいた。やかんのせいで、そのどちらが百合子議員の恋人なのかわからなかったのだ。

「百合子議員！」

わたしは叫んだ。きつともう会えない。やかんを抱えた百合子議員はとても駆け落ちする人には見えなかった。恋をしている人にも見えなかった。百合子議員が指輪をしているのかどうかわからなかった。ただ不似合いなやかんだけが目に付いた。百合子議員は一人ぼっちに見えた。まだ春の来ない肌寒い日だった。あんなふうを抱える空っぽのやかんはひやりと冷たい。あの古いやかんは何の役にも立たないままだった。誰の物にもならなかった。何のシンボルにもならなかった。何の意味も持たないままだった。わたしは何度も百合子議員を呼んだ。道行く人がわたしを振り返った。百合子議員にだけ、わたしの声は届かなかった。百合子議員はただやかんにしがみついていた。

電車はゆっくりと駅を出発した。海のゆるい波にさらわれるみたいに、百合子議員はやかんを抱えてこの町から旅立って行った。

〈J〉

赤染 晶子 Akazome Akiko

74年生。10年、『乙女の密告』で芥川賞を受賞。外国語大学でドイツ語を学ぶ乙女たちと、「吐血」という語が日本語で「一番好き（1）」なパツハママン教授との、熱すぎる授業を描く爆笑コメディ。のみならず、『アンネの日記』という他者の言葉を読むことをめぐる小説でもある。京都祇りの会話と簡潔な記述の行動が生む飛躍が魅力。「うつつ・うつつ」、『WANTED!! かい人21面相』（文学界、11年2月号）など。

講談社◆話題の文芸書

あたしの彼氏

青山七恵

定価 1,680円 (税込)
ISBN978-4-06-216882-3

「怒ったり
困らせたりしないと、
本当に彼を
好きじゃないように
思えてしまっつー！」

恋は理不尽。
恋は不条理。

鮎太郎(主人公)には気の毒だけど、
美男な彼の女難は最高に面白くて、
恋愛文学の“型破り”な
傑作が生まれました。

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

始まる、始まる、始まる、

あたらしい書き手とことばに震えるために



蓮實重彦 + 川上未映子
創刊120周年早稲田文学新人賞記念対談

Photo Michi

本語の慣行と真正面から向かいあうのを避けてきました。古井由吉さんの小説を読むと、一人称単数を主語とした文章を避けようとする姿勢がけしからんと思っほつ見事で、思わずため息がでています。応募作品を読みながら、そうしたため息をいくつもつきたいという贅沢な期待感もあります。

「わたくし」を盗んじゃいました

川上 いまのお話で、映画のことを思い出しました。わたしはまったく映画はわからないんですけど、その理由のひとつに、観るのがただただ苦しいことがあるんです。それがどんな映画であっても、そこでものが動いているだけで感動的だし、本来だったら見えないものが画面の中に見えることにもただ圧倒されるのですが、そのこと「二時間半をさらされるのが耐えられない。その理由は幾つかあると思うのですが、観ていると映画の側がパースペクティブを奪われていくという感覚がひとつあるのではないかと思います。本は逃げ場があるというか、「本」と「読んでいる自分」が「わたくし」がどこまで対等な感じがするんです。そのこと、いま蓮實さんがおっしゃった、一人称単数を書かないことがつながらぬ気がします。

蓮實 どこかで関係しているでしょうね。映画をきもせず観られるのは、それが一人称単数を主語とした言説ではないからかもしれません。

川上 蓮實さんがさきほおっしゃった、一人称単数を主語にして文章を書くのが苦手というのは、「私」と書けるなら書きたいけれどもそれを拒否する明確な理由がある、あるいは拒否する理由がある、というところなんです。

蓮實 正直なところ、拒否というより、こそはめくって書けないのです。とくに論文などの場合、状況からしてどうしても一人称単数を使わなければならない。そういうときに「我々は」と書さなければならぬ。そういう慣れが「我々は」といわれフランス文学研究の場合、フランス語の総称的な一人称複数の「我々」を、意味としては単数形で使うわけです。でも、この歳いまで「我々」でもありません（笑）。かといって「僕」や「ぼく」もいやですから一人称単数をどう書くかは、後期高齢者に限りなく接近しつつあるわたくしの、半世紀かけてもまだに解けない謎なんです。で、最近はどうしているんですか？

川上 どうされているんですか？

川上 なにを学ばれるんですか？

蓮實 「ことば」です。じつはこの年齢になっても、日本語の書き方がよくわかりません。「この漢字をひらくかひらかないか」「どこに読点を打つか」「どこで改行するか」ということをいまだにわかっていないのです。しかも、小説に規則はなく、あるいは「言語の規則」だけだという意味で、小説はいかに脆弱なジャンルですね。小説を読むことの喜びは、作者がその脆弱さにどう耐えているのか見きわめることだと思います。「小説にはなにをどう書いてもいい」といわれませんが、それはなにをどう書いてもだめだというのと同じでしょう。その不可能性と可能性のほさまで、こぼれがどう揺らいでいるかを見たい。

川上 その小説の揺れを、たまたま、とついついどこかに見

ため息をいくつもつきながら読みたい

川上 前作がある作家の小説に純粹な読書として触れること、あるいは書評などの前提がある状態で小説を読むことと、新人の小説を読むとは違うことだろうと——つまり新人賞の選考のための読書というのは改めて特異なことであるわたし自身は思っているんですが、蓮實さんが今回初めて小説の新人賞の選考委員になられたにあたっては、どんなお気持ちですか？

蓮實 公募に応じた小説を読むのは、これが初めてです。それどころか、自分が公募に応じた文章を書いたこともありません。ですから、不特定多数の一人として自分が審査されるという経験もないので、選考としては審査するということより、むしろいろいろ学ばせてもらいたいという気持ち

言い聞かせています。川上さんの「わたしは率いん菌、または世界」、あの題名を引用すればよいのだと思ひ、ちょっと「わたし」を盗んじやいました(笑)。

川上 引用したんですか。

蓮實 はい。そうして書いたのが「随想」という本なのですが、誰もそのことを指摘してくれませんでした。それまでほとんど使ったことのない「わたし」があそこで頻出してゐるのは川上未映子起源なのです。あれが「私率」でなかったことが幸運でした。

この一瞬だけが「始まりだ」という確信

川上 新人賞はテキストだけを見る——作家に対してあらゆる一切が言及できない状態で、純粋なテキストは小説しか存在しないわけで、それだけを読む、それはひじょうに緊張するんですけどね。一回二回が、文字通りの一回性に支えられてゐる。

蓮實 そう思います。わたしとしては、その緊張を快楽に変えてみたのですが。

川上 最終選考に残った五作なら五作があるとして、あるいは繊細な細部を意識した抜群の解像度で書かれていて、あるいは物語のアイデアが突出していて、また別のあるものはものすごく文章が巧く、あるいは詩的な想像力が爆発していて、すべてのジャンルで同じような強度で同じように驚くようなものがきたら、わたしはどの突出したところを種めばいいだろう、とよく考えるんです。

蓮實 そうしてどうなったらどうしよう、と心底替へてみます。「蓮實は頑固な老人だから、自分の趣味だけで判断するだろう」と思われがちですが、そんなことであり、個人的にはただ驚かすことがない。何歳の書き手であろうと、性別を問わず、驚きにみちた作家のことばに出会ふたい。

川上 なにかに驚き、そこから選ばなければいけないとき、どこに軸を取って選ぶかがほんとうに悩まして。また作品に出会ってものないに、もちろん「小説のどこを読むか」という前もっての問いは、結果的に選んだ作品の「この小説のどこを読んだ」以上のものにはならないし、出会ってからは全部解決すると思ふんですが、でもオールジャンルのすごい作品がそれぞれ集まってしまうかもしれない。という期待と得意感がある。そんなふうに小説のポテンシャルについて思い巡らせていると、たゞはワカカとかをほめて褒めたりめぐった二行目で全貌は見えないけれど、しかし

しなかが強烈に始まる感じがして、あえていうのだとな、と思つてしまいます。しかしその「始まる感じ」を持つ小説はけっこう多くない。短編であつたら長編であつたら、それが書き手が持つものかテキストが持つものかわからなければ、舞台装置というか美術というか、小説の幕があつたときに見えるあの感じは、なんなのだろう、と。

蓮實 映画だと、「ああ、始まる」という戦慄的な瞬間がある作品と、いつのまにか二時間経つてしまふ作品とがたしかにありますね。たとえば侯孝賢監督の『百年恋歌』の冒頭の三分間は、なにかが始まるところに感じ、カメラの動きも画面の照明も役者たちも音響も震えていく感じがする。始まる、始まる、始まる、と——なにか始まるかはわからなければいい。

川上 それに相当するものが、おそらく小説にもあつて思ひます。

蓮實 映画であれ小説であれ、あらゆる「始まる瞬間」は、なにもないところからなにもかへと媒介なしに移行する狂暴なものじゃないですか。そんな話の世の中にあるのか、と思つて(笑)。「百年恋歌」にしても、セリフもなく、誰だかわからない男と女がヒリヤドをしていくだけのな、まさに「なにもないところからなにかへの媒介なしの移行」がなまなましく生起している。「始まり」なんていうのも存在するはずなのに、いま見ている瞬間だけが「始まりだ」と確信するしかない一瞬というものが確かにある(笑)。

たくさんある人生のなかの、ちょっとだけほんとうの二日

川上 小説の力と物語の力とをどうものをあえて分けてみたときに、やはり物語の力というのは浸透していて圧倒的なぶん、大変に危険なものだと思います。そこにあるだけになにもかも呑み込んでしまうような物語という巨大な装置に対してだけ緊張していられるかが、読むにしても書くにしても目の前の小説の強度を担保するのではないのでしょうか。少なくともこのあたりの要素がねに緊張関係にある、それに支えられているものが小説で、「物語に身を委ねる」とか「わからないものを、わからないままに書く」という境地は、その後にはかやうていもないものだと思います。

蓮實 小説の強度はその本質として排他的ですが、物語の力は妥協の風土を煽りたてがちです。すいぶん誤解されて

いるのですが、わたし自身は、物語のない小説がいい小説だ、などとはどこでも言ったことがない。小説は題材として「物語」を絶対にする。ただし、物語というのは読めてしまう。書いていなくても読めてしまう。「物語批評序説」などは、そのことを批判したんです。

川上 たとえば物語の関連でいうと、「ハノン」を読んだ、「シマが死んだと思つてゐるひが多いいです。とにかく「おそろくシマは死んだと思つた」という感想がすごく多かったんですね。

蓮實 それに対するたかひは、やはり物語批判じゃない。「あんたらよく平気でそういうことをいふな」と(笑)。しかし、「シマが死んだ」とは、それだけは考えなかったな。まったく書かれていないでしよう。

川上 はい。「シマは死んでいません。でもあつた状況だと、やはりどうも狂りに死にます。死にます。でも、あんなのはたくさんある人生のなかの、ちょっとだけほんとうの二日なだけ。そうやって死ぬすにどうに生きていかなくやいけないからそたいへんなんですけれどね。それも、書いていないことまで読めてしまう、というんですけどね。

蓮實 ええ。川上さんはそう書いていないのに、そう読んで物語を自分に都合よく完結させてしまふ。思えば、近代小説はそういう読まれ方と妥協しながら、ほほ、世紀半やつてきたわけですね。結局ひととは、小説なんか読みたくな。小説が物語として消費できるかきりにおいて読むだけです。どこに「シマが死んだ」と書いてあるのか証拠を出せといいたくりますが(笑)、そうすると物語が完結して、余韻が生まれる——そんなふうで考えることが多いいんです。小説はそういう完結性は求めていないのに、川上さんだって「シマが死んだなんて書いてないじゃないか」と心の底から思われるでしよう。(笑)

川上 ええ、思います。ほかの部分はどう読まれても大丈夫だけれど、あそこで「シマに死なれてしまつたのは困ります」。

それは正解ではない。

蓮實 そもそも日本の近代文学は、大半がポエジーに依存してきた。そのことも無関係ではないのかも知れませぬ。先日、たまたま高橋源一郎さんの「アキマ」(ニッポン)を読んで、大江健三郎さんの中原中也をめぐる講演を高橋さんが聞く場面で大笑いしてしまいました。「帰郷」という作品が大嫌いだったという大江さんは、その最後の「心

置きなく泣かれよと、年増婦の低い声もする。あ、おまへはなにをして来たのだか……吹き来る風が私に云ふ「この部分で、「なにをしてどうも吹き来る風」に問われる理由がない」と怒り狂つたらしく(笑)。それでまもなく思ひ出したのは、わたしが大空に入らなま、汚れたちまつた悲しみに……」を滔々と暗唱するもつがいて、仰天したことでした。

川上 いまでも、あの詩はちょっと好かれてゐますよね。

蓮實 しかし、日本の小説はあれを壊さなきゃいけない。第一、「あ、おまへはなにをして来たのだ」とのあとに「……」と点が六つも並んでいる。この点はなんだ、と(爆笑)。当時のわたしは耐えがたかつたのは、このような点を平気で書くことや、それが印刷されたものを眺めて恥ずかしさを感じない連中が少なからずいたことでした。そんなやつは馬鹿だ、と。だから高橋さんの本を読んで、同じことに同じ詩について、せんとせし理由で大江さんも怒つていたので知り、心から愉快でした(笑)。

川上 三点リーク問題ですね。今は句点をみつつ、というのもありませぬ……。どちらも使うと雰囲気が出るんですけどね……(笑)。

蓮實 その雰囲気は、散文のものではないんです。あれが許されるのは歌謡曲の世界でしょう。あとは丹生谷貞志さんへへ。

川上 私もおもて自分の書いたものを全部調べます(笑)。

蓮實 「……」は「……」に含まれる曖昧な情緒です。そこで、「シマを勝手に死なせてしまつた」と同じ「余韻」が働いている。わたしの批判であつて、小説から物語を引き離してどうこうはまたく言つていい。

「ただ書かれていゝはを讀みましようよ」と。そうすれば、簡単に物語として消費されることになるだろう。たまたま「シマ」という名前がフリークナーとも関係あるでしよう。

川上 はい、フリークナーの奥さんの名前です。

蓮實 それから「斜視」という細部にはサルトルにもつながつていへ。

川上 そうですね、最後の並木道は口カンタンの嘔吐のシーンにも呼吸してまふ。

蓮實 ことを拾つていゝのは、さういう、いなをどうにかある不気味な拡がりを感じ取ることもあつたはず。

川上 わたしに限らず、ひらが使えるほどにこのことは

無意識過剰な目撃者日記

岸本佐知子 + 都甲幸治



リディア・デイヴィス『話の終わり』

岸本 amazonに「お前はこれも好きだろうシンステム」ってあるじゃないですか。

都甲 そんな名前じゃないですけどね(笑)。

岸本 説明しますと、amazonで本を買ったりチェックしたりすると、それを向「」が覚えていて、「こっちが好きそうなものを勝手に推測しておすすりリストを作ってくれる。で、あるときから、そのおすすりめいちはほんにAlmost No Memoryがくるようになって」。

都甲 最初に訳された『ほとんど記憶のない女』ですね。

岸本 そのときはリディア・デイヴィスを知らなかったから、何か月も無視していたんですけど、いつまでたっても上にある(笑)。でも、表紙がルネ・マグリットで、ちょっといい感じなんです。わかったよ、そんなに言うんなら「って根負けして買って読んだら、ものすごく面白かった。

都甲 こんと訳された『話の終わり』の「訳者あとがき」見て、びっくりしましたよ。リディア・デイヴィスの本って10冊以上あるんですが、「ぜんぶ訳す」と言っちゃってるわけじゃないよ。

岸本 言った(笑)。

都甲 もちろんすばらしい作家ですけど、どこにそこまで入れ込む魅力を感じたんですかね？

岸本 ちょっと迂回して説明するとすね。わたしは、しつとり書かれた短篇とか、オーソドックスな長篇とかも好きだし、すばらしいと思うんだけど、どうし

ても根が「筒井脳」なわけです。

都甲 なんです、それは？

岸本 中三の修学旅行のとき、電車で読む用にと、見ず転で筒井康隆の本を買ったんです。忘れもしない『日本列島七曲り』という短篇集。読んでみると、それまで読んだどんな小説ともちがっていて、「うわあ」って、びっくりしたんですが、腑に落ちたところもあって。だって小説って文字なんだから、どんな無茶苦茶をやってもいいわけじゃないよ？

都甲 そうですよ。

岸本 なのどの小説も、あたかも空気を讀んだかのように、それなりの型があるというか、ルールをきちんとして守っている。子供のころから薄々そこに不満をもっていたんだけど、筒井康隆に出会って、「やっぱりここまできついな」って腑に落ちた。だからいまだに、「どこかでぶち壊れる&ぶち壊してるものに心惹かれるところがあって、リディア・デイヴィスも似た感じの衝撃の受けかただったんです。

都甲 「小説はこういうものだ」という型を守る気がさらさらなんですからね。たとえば『ほとんど記憶のない女』は、いちおう短篇集なんですけど、短篇って言うにも短い。

岸本 ほとんど超短篇というか、「二ページのものと、数行のものまである。

都甲 二、三行ぐらいで作品が終わったり、ミシェル・フーコーを読みながら、わかりやすいセンテンスとわか

らないセンテンスの違いについて自分が考えたことを書いたりする。自由と言ったら、すごく自由。個人的には岸本訳リディア・デイヴィスは、この超短篇シリーズが続くと思っていたんです。だから、次に翻訳したのが長篇の『話の終わり』だったのが意外な感じでした。

岸本 順序的には、『話の終わり』のあとに『ほとんど記憶のない女』が書かれているんです。だから原書とは逆の順序で訳したわけですが、結果的には超短篇というスタイルが多く読者の受け入れられてよかったと思います。だから次も同じく超短篇集の『サミュエル・ジョンソンが怒っている』(Samuel Johnson is Indignant) をやる予定だったんだけど、やはりはじめるよ、なにか後ろ髪が引かれるの。

都甲 『話の終わり』にですか？

岸本 なにかやり残している感じがして、『サミュエル・ジョンソン』がサクサク進まない。「じゃあ、もしかしてこつちなかかな」と思って『話の終わり』に着手したら、サクサクではないけれど、抵抗がなかった。どうも自分内順序があつたみたい。

都甲 その本のもっているパワーみたいなものですかね？

岸本 もしかしたら、リディア・デイヴィス自身も『話の終わり』を書かないと先に進めなかったのかもしれません。簡単にあらすじを説明すると、語り手は翻訳もやっている小説家で、リディア・デイヴィス本人のよつにも見えます。そのひとが、もう10年以上前にあ

る男性と付き合っていたことを、出会いから別れまでの一部始終を思い出して書くとして、実際に書いてあるのだけれども、これがなかなかうまくいなくて、そのうちに「うまくいかない、その現在のうまいかなさ」についても書きはじめ。いちおう恋愛についての話なんだけれど、じゃあ恋愛小説かって言うよ……。

都甲 違いますよ。ほくほく、翻訳家の愚痴小説だと思っただけ。それと、女性が女性であることへの違和感小説。

岸本 そうそう、恋愛部分が八割以上なんだけれど、すごく共感したのは、翻訳家あるある「なんですよ(笑)」。

都甲 読んでて痛い。「あああああ！」って叫びたくありませんよ。

岸本 たとえば、すごく難しくてもおもしろい本ほど時間をかけなきゃいけないって、結果的に時給1ドル以下になっちゃう、とか(笑)。わたしもよく思いますもん。「マクドの方がぜんぜん高給だよ」と。まあ、わたしの場合、時間がかかるのは自分のせいなんですけどね。あと「翻訳は不幸な時ほどはかどる」とか。

都甲 ああ、出てきましたね。男に「つられて、そのことをどうしても思い出してしまう。で、思い出さないためには翻訳がよいと。逆に彼がうまくいっているときには、とりあえず遊びに行ってしまうから翻訳(笑)。」

岸本 で、ちよつどいい難しさの文章があれば、考え

対談

第34回
すばる文学賞受賞作

読者を飽かさず、小説空間を壊さず、完走させたことは作者の力量を証明している。最高に面白かったよ、
米田さん。

高橋源一郎氏
(選評より)

日常の不確かさと世界のきらめきを鮮やかに描く。

トロンプ ルイユの星

米田 夕歌里

好評発売中 ● 定価1,155円(税込)

*トロンプルイユ…だまし絵のこと



イベント会社で働くサトミの周辺で次々に消えてゆく物や人。彼らは、最初から「無かった」ことに…。誰かの手で存在も記憶も書き換えられていく不安と寂寥感を描く新たな才能の登場。



サトミのしている世界にあなたの視線を重ね合わせて、一緒に怖がったり楽しんだりしていただけるとうれしいです。読んでくれるすべての方に、感謝をこめて。

米田 夕歌里

(よねだ・ゆかり) ● 1980年千葉県生まれ。早稲田大学第一文学部文芸専修卒業。本作品で第34回すばる文学賞を受賞。

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

集英社

て解決したら達成感が得られてうれしいけれど、難しすぎると逆に跳ねかえされて、また彼のことを考えてしまう、とか(笑)。

★

都甲 リディア・デイヴィスも「翻訳が好き」と言いながら、「あ〜何日か終わらせないと家賃が払えない」と嘆く(笑)。もうねえ、辛いというか……よくわかる。岸本 翻訳のギャラがいちどきに支払われるので、そのときは「くお金持ちになった気がして、すぐに使っちゃおうって場面がありましたよね。」「こんなかも」「え、書いたのわたしは?」って。

都甲 「リディア!自分だ」と(笑)。

岸本 こと世知辛方面に関しては、すく身につまされるし、笑えます。

都甲 あと、頭でかちでありながら、いろんなものに裏切られますよね。自分のからだとか、付き合っていた彼とか、みんな思い通りにならない。

岸本 一歳年下の男と付き合っていて、付き合っている間はすくツンケンしていたくせに、捨てられたら急に未練が爆発して、精神も崩壊してストーリーみたい

になっちゃったんですけど、にもかかわらず作中には「失恋」って言葉はただの一度も出てこない。だからこれ、恋愛小説の皮は被っているけれど、自分観察日記なんじゃないかと思うんです。生活のことにせよ、心の動きのいちいちにせよ、ひたすら自分を、アサガオを観察するみたいに観察している。

都甲 「悲しい」とかも、ほんとど出てきませんね。岸本 代わりに「息がでなくなつた」とか「ものが食べられなくなつた」とか「寝返りがつてなくなつた」とか、どこまでも観察スタイルなんです。このひとは、自分の頭のなかに住んでいるんだなあ、と。

都甲 彼女は大学で授業をするんですけど、頭で先行演習して授業をやると必ず失敗する(笑)。つまり「頭でつちなひとが、どんなふううに人生を次々と失敗するか」のドキュメンタリーになっているんですね。フローベールの『ボヴァリー夫人』は、主人公のエマが、朝から晩までハレクインみたいな本を読んで「すてきな恋愛がしたい」と言っていたあげく、恋愛に狂って死んでしまつて衝撃の話ですが、リディア・デイヴィスは、『ボヴァリー夫人』を訳してもいますし、近代文学の伝統

に則った、クラシックな主題を扱っているんだと思うんです。

★

都甲 『話の終わり』は、二五〇ページ以上にわたって昔の男のことを書いているくせに、その男の名前が最後までわからないんですね。

都甲 そうそう。でも、彼のファーストネームは一首節で、名字はやたらと子音が多くて発音が難しいとか、ヒントは書いてある。もう読んでてイライラしちゃって(笑)。

岸本 そのままで書くなら、教えるよ! っつて(笑)。都甲 結局、最後まで読んでわからない。これは「わからない」ことが大事で、作品にわざと穴があけてあるんですね。彼の名前を呼ぶ／呼ばない、読者に教える／教えないことで最後まで引っ掛かる、そのリアリティはなんなのかなと思つたんです。

岸本 男の名前を書かないことに決めるまでのプロセスも書いてあるんですね。語り手は、相手の男と自分の分身みたいな女の名前をどうするか散々考えて、男にハンクって名前をつけた。で、分身の女をローラと

か、スーザンとかにするんだけど、スーザンという名前の女は、ストーリーしたり、バカなことはしたりしないなあ、とかいろいろ考える(笑)。

都甲 ハンクが好きでした。「ハンクなんていう名前の男を好きになる人間がいるとは思えない」し、友だちに言ったらハンクみたいな名前と言われてすくく不愉快だったので消したって(笑)。どんな小説だ! 岸本 ステファンにしていたともありましたね。都甲 そしたら今の夫に「ヨーロッパ風で気に入らない」って言われて止めるんですよ。

岸本 なんて夫が嫌がったかと言うと、はつきりは書いていないんですけど、夫は妻が書いている小説には、彼女の恋愛遍歴がいろいろ書いてあるに違いないと思つているんですね。とくにヨーロッパで、妻が今までに破廉恥な恋愛を重ねてきたはずだ、と思ひ込んでいる。

都甲 でも夫はこの作品を読んだら引くと思ひますよ。だって、ちょっとだけ付き合った相手のことも、いっぱい書いているじゃない。

岸本 デートにお母さんを連れてくる男とか、変な空

き家の二階に住んでいる男とかね。この主人公、なにをやってるんですかねー！（笑）

都甲 え!? 反感ですか、それは。

岸本 いや、羨みですわね。

都甲 羨み（笑）。でも、本人は絶対モテないと思ってるんですよ。自分は理屈っぽいし、男と別れたあととは彼と付き合っている女を憎み、若い女一般を憎み、この街の女全員を憎んだみたいなエグいところがあるし。

★

岸本 とっついで都甲さん、この相手の男ってどう思いましたか？

都甲 いや、嫌いですわね。あのねえ、まずイケメンでしょ？

岸本 イケメンとは訳してないけど（笑）。

都甲 そもそもイケメンだということにしよう。

岸本 これ反感、ます。
都甲 そしてけっこうガイがいい。おそらく格好がグランジっぽい。カート・コバーンみたいな方向でお洒落なんです、きつと。

岸本 そのくせお金はない。

都甲 「金ないけど、なんかみんな食わしてくれんだよね、それはおれが魅力的だから」みたいなことを言う。
岸本 言ってないけどね（笑）。

都甲 事実上言っている。それから困ると、適当な女のところに転がり込んで暮らしているけれど、「べつにそいつが好きじゃないうわい。本当はお前しかいないだ」と主人公に言っ感じとか。ぼくは三四歳の女性と一体化して読んだので、年上の女性が、すくくかわい男の子を「もうたまらない」と思っ気持ちわかんなくてもいい。けど本を置いて男に戻ると、こんなイヤな奴はいないですね。

岸本 訳してていなが辛かったって、この「彼」がまったく魅力的に思えなくて、いちいちイラッとするんですよ。嘘つきというわけではないんだけれど、言動が無責任なんですよ。無意識に事実と違うことを言うたります。

都甲 「ポルトガルの魚スープを作るのが得意」とか言うんだけれど。

岸本 ちゃんと聞いてみると、「まだ一度も作ったこと

はないがたぶんうまく作れると思っ」に変わる（笑）。

都甲 「いるいる、こういう奴」って感じでしたよね。

岸本 カリスマ学部の男の子とか。
都甲 カリスマ学部生!! なにそれ、そんなのがあるの?（笑）

都甲 当たり前じゃないですか。

岸本 そういっ子は学業的にはどうなんですか？

都甲 意外と成績いいです。

岸本 そこがまたイラッとくる!

都甲 でも、無責任でかつ成績が悪かったら、腑に落ちるでしょう? でも世の中は腑に落ちないこと多いじゃないですか。

岸本 魅力とウザいところが斑々になっているんですよ。
都甲 でも、この作品はそこがいいところだと思っんですよ。主人公が女性の大学教師でしょう。その相手が、五〇歳のナイスミドルで物をよく知っっていて、理解してくれる男だったら、なんにもおもしろくない。彼の魅力を「ワインに詳しいの」とか言われた日にはぶぎけんな! って話じゃないですか。逆に、この小説は、自分でもなんで好きなのかわからないけれど、動物的に、性的にただ惹かれて、自分の無意識も行動もぜんぜんコントロールできないことを描く。

岸本 最初から最後まで男の話をしているながら、彼の魅力は伝わらず、頭のいい女のひとが、こんな男に惚れちゃうその部分が、まったくのブラックボックス。
都甲 『ほとんど記憶のない女』にも、「わたしのようにインテリに囲まれて、常にものをうだうだ考え続ける女は、カウボーイと付き合うしか、こんな人生から抜け出す道はない」と断言して、でも身近にカウボーイはいないので、ベトナム帰還兵と付き合う話がありましたよね。

岸本 そうそう（笑）。このひとつって、ちよつと「だめんす・うおーか」っぽいんですよ。そのカウボーイも自分の授業に来ていた生徒なんです。あ、このひとカウボーイっぽい」と思っただけだ。

都甲 根拠がない。

岸本 実際は、発掘したチンパンジーの骨を継ぎ合わせる仕事か何かをしている（笑）。あとトロンボーンを

吹いて、全身黒くめで、一滴もカウボーイじゃないんだよね。

都甲 崖の上で熱烈にキスしたあと、「別居中の妻とまたいっしょに住むから、もう会えない」と言われて、「ええ!?」みたいな。

岸本 「大学教師」という短編ですわね。

都甲 大学の先生にならなっただかねえ、心配ですけどね（笑）。「相談なら乗るよ」って感じですよ。

岸本 相談に乗られても困りますけどね。頭はほんにぶくらんでるじゃないですか。

都甲 『話の終わり』の主人公は、同居しているニューエイジな女のひとに相談したあげく、何回も止められるんだけれど、どうしてもストーカー行為をやめられない。彼のものらしき車を見つけたら、車の前のバンパー同士をつき合わせるように駐車して、確かめたりする。明らかに違法行為ですよ（笑）。

岸本 いや、ほんとに全篇「姐さん、なにやってるんすか!」って言いたくなります。

★

都甲 岸本さんは『話の終わり』の少し前に、「ミランダ・ジュライの『いちばんここに似合う人』も翻訳しましたよね。お聞きしたいのは、ミランダ・ジュライとリアディア・デイヴィスは、キャラが被るような気がするんですよ。王手を版子でない版なんです。ミランダ・ジュライはモテる版。
岸本 いや、でも非モテ度はミランダのほうが高い気がする。
都甲 その論争ですか？
岸本 その論争はやめましよう（笑）。でも、ミランダ・ジュライがリアディア・デイヴィスの蔵になったら案外似た感じになっているかもしれない。

都甲 ふたりとも「自分トキウメンタリー、でも無意識過剰」な感じが近いと言えてっ。
岸本 かなり痛い自分を平気で書いちゃって、その痛さが突き抜けてユーモアになるところ、とかね。自分のことを書いているようで、絶妙に自分から距離をとっているところがありますよね。

都甲 そうすると、「リアディア」岸本?（笑）
岸本 え?。

都甲 『話の終わり』の主人公が、公衆浴場で女性のからだをものすごく観察して、どうしてこんなにバリエーションがあるんだと驚くじゃないですか。岸本さんも銭湯に行っているんじゃないのからだをものすごく観察したって言っていた気がする。

岸本 え!? それ夢でしょう?（笑）

都甲 ぼくの妄想かなあ?

岸本 えーとですね皆さん、「都甲変換」という言葉があっですわね。都甲さんのなかで記憶が捏造され、そして定着され、「こつやって話す」ことによってさらに定着してしまっという、恐るべき現象です（笑）。まあでもそれはたしかに考えたことあるから、本当に言ったのかもしれない。

都甲 でしょう? そうしたら、小説のなかにそのまんなまの描写が出てきて、「こわっ!」と思ったんです。訳しながら書き加えました?（笑）

岸本 加えないよ!（笑）でもじつは、衝撃のあるポイントがあっ。私は自分のことをことさら女だとは思っいなかった」といっ節があっ、鼻血が出るほどびっくりました。「なぜそれを知っっている?」と。

都甲 「なぜ?」って言われても、そんなの知りませんよ（笑）。でも、単に「おもしろい」というだけじゃなく、どういっふうに着らしててどういっふうで考えているかも、よくわかるように書かれている点で、『話の終わり』の魅力であり、岸本訳の魅力なんじゃないかという気がします。

岸本 その意味でも、『話の終わり』は「リアディア・デイヴィス入門」としていいんじゃないかと思っんです。「メイキングオブ」になっているから。

爆笑トークはまだ続く! ここに収め切れなかつた「翻訳こぼれ話」を3月下旬に早稲田文学ウェブサイトで公開予定(www.dungaku.net/waseibun/)。乞っご期待! この対談は、リアディア・デイヴィス『話の終わり』(作品社)刊行を記念して、10年12月19日にオリオン書房ノルテ店で行われたものを再構成、および加筆修正を加えたものです。

旧作異聞

23



『しろばんば』(新潮文庫)



斎藤美奈子
Saito Minko

56年生。94年、『妊娠小説』で評論活動を始める。古巣とベストセラー、時事問題からマンガ、アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著作には、読者の物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。「文芸春秋」「本の棚」など。

伊豆を代表する当地文学と云ったら、多くの人が思い出すのはおそらく川端康成『伊豆の踊子』(一九二六年)だろう。

しかしながら、『雪国』がしよせん東京の男が雪国の温泉宿に逗留するだけの話であると同様、『伊豆の踊子』もしよせんは東京から来た一高生が旅の一座の後をついて歩くだけの小説だ。伊豆文学をもし一作だけ選ぶなら井上靖『しろばんば』(一九六二年)だろう。井上靖は北海道の生まれだが、子ども時代を中伊豆の湯ヶ島(静岡県伊豆市)ですごした。『しろばんば』はその体験を元に書かれた自伝的小説だ。

舞台は大正中後期(一九一〇年代後半)の湯ヶ島。主人公の洪作は五歳のときから両親と離れ、母の実家で暮らしている。曾祖父の妾だった「おぬい婆さん」になつている洪作は、婆さんとふたり、屋敷の一角の土蔵で寝起きしているのである。曾祖父も祖父も開業医だった母の実家は名家であり、母屋の曾祖母や祖母とおぬい婆さんは仇敵同士である。が、複雑な家族関係にもかかわらず、いじけた人物は出て来ず、大人も子どももそれぞれの矜持をもって生きている。前編は小学校低学年、後編は高学年。中伊豆の豊かな自然を背景にした洪作少年の成長譚。それが『しろばんば』の世界である。

しかし、この小説が当地文学として優れているのは、ただ単に中伊豆の自然や風物が描かれているからではなく、外界との往来によって、湯ヶ島という土地を外から眺める視点が獲得されているからなのだ。

まず、伊豆の外から都会の風を持ち込んでくる人々がいる。沼津の女学校を卒業し、洪作の小学校の教師になった叔母のさき子。帝室林野管理局天城出張所の所長の娘である一級上の転入生・あき子。沼津に赴いたときに出会った大店の娘・蘭子。息子がおぬい婆さんの影響下にあることをよく思っていない母の七重。彼女らに対する憧れと、彼女たちに田舎者扱いされたことからくる小さな反発が、洪作の目を開かせていく。

こうして最初は隣村の伯父の家に泊まりに行くのさへ嫌がった洪作は、やがて伊豆半島の付け根の沼津から半島の先の下田までひとり往復するようになる。土蔵にはじまり、少年の成長とともに拡大する行動半径。

洪作にとってとりわけ大きな意味を持つのは、三島へ向かう軽便鉄道の発着駅、すなわち田舎と都会の接点に位置する大仁だ。はじめて豊橋へ旅したとき、彼はそこを(まったくの異郷)と感じ、(湯ヶ島の新道より賑やかな通りがかなり長い間続いて)いることに目を奪われるのである。

物語のラストシーンも大仁だ。おぬい婆さんの死後、中学受験を控えた洪作は父の新しい赴任先である浜松に向かう途中でこの駅に降りるのだ。かつては馬車が通っていた駅までの街道に、いまはバスが走っている。

〈小さい時から、大仁という名を耳にすると、そこが都会でもあるような眩しい思いに捉えられた〉と書かれる街が、成長した洪作の目はどう映ったか。乗り換え駅の風景で小説が終わるのは、彼の成長と同時に、彼の人生はまだ途上にあることを暗示しているよう。『伊豆の踊子』が伊豆に旅する(入ってくる)若者の話なら、『しろばんば』は伊豆から旅立つ(出ていく)少年の物語なのだ。

中伊豆で井上靖がいまも敬愛されている証拠に、湯ヶ島小学校には井上靖の別の詩からとった文学碑とともに「しろばんば」の像(!)が建ち、旧井上靖邸は近隣の「道の駅 天城越え」内に移築保存され、作家の命日に当たる一月二九日前後には毎年「翌槍忌」が営まれている。作品と地域が幸福な関係を保っている例だけど、問題は伊豆文学と聞いて真っ先に井上靖を思い出す人が全国にどのくらいいるかである。

マリオ・バルガス・リヨサ

チボの狂宴

稀代の独裁者トルヒーリヨの身に迫る暗殺計画を復眼的に描く、圧倒的大長篇! 八重樫克彦・山貴子(訳)



2010年ノーベル文学賞受賞!



絶賛4刷! 3,990円

顔のない軍隊

「インデペンデント」紙外国小説賞(トウスケツ小説賞受賞作!)

エペリオ・ロセーロ 八重樫克彦・山貴子(訳) ●2,310円



骨狩りのとき

「アメリカン・ブックアワード受賞作!」

エドウィー・ジタンティカ 佐川愛子訳 ●2,500円



愛するものたちへ、別れのとき

「全美批評家協会賞受賞作!」
エドウィー・ジタンティカ 佐川愛子訳
●2,500円



作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 備税込
TEL.03(3262)9753 FAX.03(3262)9757

現代作家が選ぶ世界の名作リターンズ② 選・木下古栗

黒い手帳

久生十蘭

黒いモロッコ皮の表紙をつけた一冊の手帳が薄命なようすで机の上に載っている。一輪挿しの水仙がその上に影を落している。一見、変哲もないこの古手帳の中には、ある男の不敵な研究の全過程が書きつけられてある。それはほとんど象徴的ともいえるほどの富を彼にもたらさずであったが、その男は一日鋪石を血に染めて窮迫と孤独のうちに一生を終えた。

この手帳を手にいれるためにある夫婦が人相の変るほど焦慮していた。けっきょく望みをとげることが出来ず、恨をのんで北のほうへ旅立って行った。そしていい加減なめぐり合せで、望んでもいない自分が、遺品といった意味合いでうやむやのうちに受取るような羽目になった。運命とは元来かくのごとく不器用なものであろう。

今朝着くはずであった資料の行李は事故のために明日まで到着せぬことになった。焦だたしい時間をまぎらわすためにこの黒い手帳をめぐって起った出来事をありのままに書いて見ようと思う。彼とある夫婦の間の微妙なもつれについてである。

当時、彼は六階の屋根裏に、夫婦は四階に自分は中間の五階に住んでいた。この二組の生活を観察しようと思うなら同じ数だけ階段を昇降するだけでよかった。自分は階下で夫婦と談話し、すぐその足で六階の彼のところへ上ってゆく。互いに関知せず、そのくせ微妙に影響し合う興味深い二つの生活を自分は両方からあますところなくながめていたのである。

自分は文学者ではないから面白いようにも読みやすいようにも書くことは出来ぬ。が、ものを見る眼だけはたいして誤らぬと信じる。自分は見たままに書く。これを書く動機は充分にあるのだが、それまでうちあける気はない。懺悔のためとも感傷

オッス！ この作家のものは以前短編を幾つか読んだのみで、今回架空文庫で読める分は続き物を除きおおよそ読んだ。感じた特徴としては、人が死ぬ話が多い、技巧的ではあるが随所に都合のよすぎる展開や道具立て、思いきり説明的になる所があったりしてそれが書き物としての運動性や生々しさを生んでいる、(時代が違ってもあるだろうが)登場人物が実際にいそうというのでなくまさに登場人物でしかない質感を持っている、といったところだろうか。この作家の小説は露骨にありありと作り物で、しかし作り物としてのリアリティがある。つまり虚構を媒介にして「現実」だとか「人間」だとか「性の深淵」だとか、何でもいいが幻影としてのリアリティを欺瞞的に感じさせるというよりも、現に虚構としてあるそのリアリティを感じさせる(この意味で特に「予言」が傑作)。親子や男女の慕情といったありふれた情感などを誘われるにしても、小説をその効果のための道具とするのではなく、そういうものを抱えた登場人物やその関係を駆使してまさに小説を生み出す、その生成の過程、手つきを読む感じを覚えるのだ。「黒い手帳」はその手つきが一種、「自分」として作中に顕在化したものに思える。本来黒子のはずの手つきが現れるのだから裏から操る場合にはない波紋が生じる。つまり「自分」の関わり方はどこか不自然で、取って付けたような理屈付けや思案をとまなう(ただしこうした箇所は

のためとも、勝手にかんがえてくれてよろしい。

一、この年の中頃から為替は不幸な偏倚をつづけていた。三ヶ月目にはむかしの半分に、半年の終りには約三分の一になってしまった。留学にたいする自分の年金は一定の額に釘付けされているので、研究に必要な所定の年月だけバりに止まるためには為替の率に応じて生活を下落させてゆかねばならぬ。そういう

岩波文庫収録の初出に比べると架空文庫の改稿された版ではかなり削られているが。「運命」の操り手を楽屋から見物「あくまでも観察」と嘯く少し後で「共犯以外のなものでもない」と語ることからもそれは窺える。「自分」は出来事を記す書き手に握えられていると同時に出来事の中の登場人物、しかも作動要因でもあるのだ。その結果、人が死ぬ。しかし「薄命」なのはその人物だけでなく、書き物それ自体もだ。なぜならそれが現に生きて在るのは、その生成においてのみであるから。

我々は書かれたもの、既に死んでいるものを読んで、あたかもそれが生きていような感覚を味わう。つまり読書というのは霊体験なのだ。だから内輪褒めの書評や物々しくて思わせぶりの批評、意味ありげな自作解説、架空文庫に収められた名作についての拙い感想などを読む際、我々はしばしば鼻クソをほじりながらこう思うのである。「てか、それってアンタの気のせいじゃね?」



◎朝比奈あすか

木下古栗

Kinoshita Furukuri

81年生。教師日ノN☆B-I-N★本物語「夢枕に寝がし」等、出オチ感満載のタイトルながら、中身は超絶技巧。硬軟さまざまな文体を操り、語りを自在に変え、破綻す前のところで作品を成立させる。次は何をするのか、わくわくひびや期待「ボジテイヴシンキング」の末裔等。

う理由によって半年の間に三度移転した。一度毎に興味が悪くなった。三度目のこの宿はこれ以上穢くては人間として面目を保つことは出来まいと思われるほどのものだった。

手すりのかわりに索をとりつけた穴だらけの暗い険しい階段を非常な危険をおかしてのぼってゆく。五階のとつつきに、その部屋があった。鉄棒をはめた小窓がひとつ。瓦敷の床、むきだしの壁には二三日前の雨じめりがしつとりとしみ透って、と

ころどころに露の玉をきらめかせている。これを人間に貸そうというのである。着想のすばらしさに感動してその部屋を借りることにした。為替の下落もよもやこままでは追いつくまい。とすると当分移転のめんどろだけにはぶけるからである。

寝台に腰をおろしてなすこともなく腕をこまぬいでいると、扉を叩いて、びつくりした子供のようない種不可解な顔をした男がはいってきた。髪は遠慮なく薄くなりかけているが、顔のほうは二十一、二歳でハタと発達をとめたものとみえる。

自分の部屋を訪れるために無理に上衣の釦を付けてきたのだろう。その釦を飛ばすまいとして一生懸命に下っ腹を凹ましているふうだった。通例の挨拶の後、舌つたらずな口調で「わたしはこの階下に住んでいるものです。お差支えなかつたら、おちかづきのしるしに晚餐をさしあげたい」とい、「なにしろ今日は、降誕祭前夜のことだから、ひとりで夜食をなさるのは、さぞ味気ないだろう。それに、妻も非常に希望しているから」という意味のことをきわめてぼんやりとつけくわえた。

一、夫婦の部屋は貧困なりにやはり家庭だとうなずかせせる和やかな雰囲気があった。その中にたいへん小柄な女が立っていた。これが妻君だった。前髪を肩の上で切り揃えて、支那の女の子のようにしている。二十四五歳であろうか。どんな男をもどきりとさせずにおかぬような煽情的な眼付で手を握ると、「ようこそ」といった、それが自分には、Je t'aime（汝を愛す）といわれたような気がした。そんな錯覚を起させる過度なものも、たしかに抑揚の中に含まれていた。

この夫婦はアメリカの生れのいわゆる第二世同志で、夫のほうは音楽を妻君のほうはピアノの勉強をしているということだった。

食事と身上話がすむとお定まりのアルバムが出てきた。いずれの前例に劣らず退屈千萬なものだった。その中に博徒のような無惨な人相をした角刈の男の写真があった。自分は興味を感じ、親族かとたずねると、それは布哇の大漁場主で赤の他人なのだが、二人の勉強ぶりに感激して義侠的に三年の巴里遊学の費用をひきうけてくれ、いまここで勉強しているのはこのひとの後援によるものだった。

部屋へ帰ろうとしてたちあがると、そのとき窓にそって

か階上から盛んに落下する物音をきいた。尿の音にちがいがなかった。自分はある爽快さを感じ、どんな奴の作業かと、たずねると、あなたのすぐ上にいる日本人がやるんです。もとは画かきだったということですが、毎日部屋にとじこもってなにか計算ばかりしているんだそうです。この宿にはもう十年以上もいるとききましたといった。

一、一月一日の朝のことである。上の部屋で傍若無人に飛びはねる粗暴な物音で眼をさました。いったい上の部屋の住人はこれまでも夜つびで部屋を歩きまわったり、けたたましく椅子を倒したりして悩ましたが、この朝の騒ぎはじつに馬鹿馬鹿しいもので、そのために天井の壁土が剝離してさかんに顔のうえに落ちてくる。これは我慢がなりかねた。

無言で扉をおしあけると、眼の前にはいささか常軌を逸した光景が展開した。広い部屋の床全面に約二尺ほどの高さにおどろくべき量の紙屑が堆積し、壁にはいたるところに数字と公式が落書きしてあった。床の上で自在に用便するとみえ、こんもりと盛りあがった固形物が紙屑のあいだに隠見していた。

長椅子の上には、極めて瘦身の四十歳位と思われる半白の人物がいて、敵意に満ちた眼で自分を凝視していた。それは何千人に一人というような個性的な顔で、額は異様に広く顎は翼のようにつよく張りだし、房のような眉の下には炎をあげているような強烈な眼があった。

彼は無断侵入が真に憤懣に耐えぬようすで「貴様なんだ」と叱咤した。自分はほとんど眼も口もあけられぬ異様な悪臭に辟易し「臭くてこれじゃ話もなにもできぬ。いま窓を開けてから話す」と答えながら斜面の天井についている窓をおし開けた。

「天井の壁が落ちてきて物騒でしょうがない。暴れるのもいい加減にしておけ」彼は急にうちとけた口調になって「実はナ、今日うれいことがあってだれかと喋りたくてしようがなかったところなんだ。おれが騒いだために貴様がやってきたというのは、こりゃなかなか運命的な話だぞ……争われないもんだ。貴様があんな口調でものをいったのがおれの感情にピッタリした。忙しくなかつたらしばらくそこへ掛けて行ってくれ。実はナおれの研究はまさに完成するところなんだ。間もなくおれは無限の財産を手に入れることになるんだ。無限だ。無限、無

限！突飛びきこえるだろうが、おれは狂人じゃないよ。おれはねこの十年の間ルウレットの研究をしていた。屑箱の中の屑のようなものを喰って、寝る目も寝ずに計算ばかりしてんだ。いったい丁半に法則がないというのが定説だ。早い話がポアンカレとかブルヌイユなんていうソルボンヌの大数学者が精密な計算を例にひいて証明している。たとえば奇偶の遊びで、いま出た目とそのあとの目というのはそのたびに永久に新規だという。これがかれらの学説なんだ。よろしい……ところがわれわれは千回骸子を振るといつも半々位の割合で奇偶が出ることをしてっている。もし目がいつも新しいものなら、もし奇偶に法則がないものなら、なぜ奇数はばかり、あるいは偶数許り千回つづけて出るような出鱈目なことがないのだろう。それは不可能じゃない、と数学者はいうだろう。それア不可能じゃない」といいながら壁に書きつけた公式を指さした。「君はどういう研究を専門にやっているひとなだね？ あおの公式の意味がわかるひとなかね？」

壁の上にはこんな公式があった。

$$n = \frac{37r+2}{18r-361} + r-2$$

(後略)



久生十蘭

Jūshū Jūran

一九〇二—一九五七、幼少で渡仏、演劇とフランス文学を学ぶ。帰国後は演劇や翻訳と多岐に亘り活躍。小説に、鈴木水木「母子像」等、凝りに凝った構成と、愛宕自在なストーリーテリングから、小説の魔術師と評される。筆名はフランスで師事したシャル・デュランからとも、久しく生きたらん、食うたらん、の意と云われる。

引用出典：『三二書房『久生十蘭全集』』より

「黒い手帳」は、右記の三二書房版全集(解説・荒正人)のほか、「久生十蘭短篇選」(岩波文庫)／『定本 久生十蘭全集』(国書刊行会)／『地底獣国』(現代教養文庫)／『日下三蔵・編『怪奇探偵小説傑作選』久生十蘭集 ハムレット』(ちくま文庫)などに、解説とともに収められています。また、作品単独は青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>でも読むことができます。

日直から。

今号の日直
西田亮介

あるIT起業家が始めた寄付とその広がり ネットに持ち込まれたタイガーマスク現象

Nishida Ryosuke

83年生。東洋大学非常勤講師。大学、行政、企業で研究、プロジェクトに幅広く携わる。最近、「新しい公共」、社会起業家論、大学発ベンチャー企業研究、情報社会論、日本のサーフィンカルチャー研究などに関心を持つ。さらに自ら「若い書き手の社会的認知を高める」ための媒体「review」を立ち上げ、アクチュアルかつアクティブに活躍。twitter ID: Ryosuke_Nishida

2010年12月25日に群馬県前橋市の児童養護施設に「伊達直人」の名でランドセル10個が届けられた。これをきっかけに、匿名や漫画『あしたのジョー』の主人公「矢吹文」といったキャラクター、「ムスカを愛するVIPPER」というアニメと匿名掲示板にちなんだ名を名乗る寄付が相次いだ。1月15日付けのNHKニュースによると、同日までに全国で1056件を越え、現金、金券を合計した額は、3240万円にのぼるといふ。これが「タイガーマスク現象」と呼ばれる現象である。

同じころ、年末年始を出張のため西海岸で過ごしていたひとりのIT起業家が日本に帰国し、このニュースを知った。(株)ユビキタスエンターテインメント代表取締役社長兼CEOの清水亮氏だ。清水氏は(独)情報処理推進機構の「天才プログラマー/スーパークリエイター」にも認定された人物で、米Microsoft社と(株)ドワンゴを経て、CMS、スマートフォン向けミドルウェア、ネットワークコンテンツなどを手がける同社を2003年に起業している。

清水氏はアメリカ西海岸のITベンチャー企業のカルチャーに親しんできた。そして薫陶を受けた上司の立ち居振る舞いなどから、無意味な消費ではなく、次の世代や、広い意味での人的投資を行いたいと以前から考えており、何かきっかけとなる「社会の風潮」がほしいと思っていたそうだ。

清水氏は、ブログを通してさっそくIT企業の社長たちに「寄付自慢選手権」を呼びかける(「IT企業の社長のみんな! 児童施設にコンピュータを寄付しようぜ!」『Keep Crazy;shi3zの日記』)。児童養護施設に、IT起業家だからこそできる、そして長い目で見て自分たちにも人材育成などメリットが戻ってくるかもしれないPCの寄付を行おうという提案だ。しかも、あらかじめ施設に需要があるかを確認するように促している。タイガーマスク現象は、施設のニーズと寄付のミスマッチという課題を抱えていたが、その修正を呼びかけたわけだ。この提案をうけ、(株)グルコースの安達真氏やZynga Japan株式会社の山田進太郎氏、ピクシブ株式会社の片桐孝憲氏、そして頓智ドット株式会社の井口尊仁氏といったそうそうたる起業家たちが参加した。

また、未だに白い目で見られることもあるというプログラム好きの子どもたちに向けて「#givemac」を立ち上げた。ITに関連する小論文やソースコード、アイデアを公募し、もっともユニークな応募者に、MacBook Airを寄贈するという取り組みだ。

こうした清水氏の取り組みに感化されて、アルファブロガーの深津貴之氏は、fladdictというブログで「寄付ハック」という別プロジェクトを始めた。3000円以上の寄付をした人のなかから抽選で、1名にiPad 2をプレゼントするという寄付促進の取り組みだ。ひと月で、確認できただけで72万5300円の寄付が集まったという。深津貴之氏の友人だというデザイナーの有馬智之氏はこの「寄付ハック」を告知するポスター・バナーを作成するなど、創意工夫の連鎖が起きた。

オフラインのちょっとした出来事だったタイガーマスク現象は、こうしてIT起業家の情報発信とソーシャルメディアによってオンラインのコミュニケーションに持ち込まれた。このような展開は、ネット中心だったこともあり、マスメディアではほとんど報じられていない。

こうした、認識された欠点を次々に改善し「修正された派生バージョン」が素早く広がった背景を理解するためには、ITとIT業界、正確には西海岸に起源を持つプログラマ独特のコミュニケーションと文化に目を向けなければならない。たとえば、世界のオピニオンリーダーたちの講演を無償で動画公開しているTEDというプロジェクトは、「Ideas Worth Spreading (価値あるアイデアの拡散)」を標榜しているが、誰かが始めたアイデアに手を加え、独自の付加価値を載せていくコ

ミュニケーションの習慣がある。

今やサーバー用OSとしての地位を確立したLinuxも「オープンソース」によって開発されてきた。フィンランドのリネラス・トーバルズというプログラマのアイデアとコア技術に対して、世界中のプログラマがコードを修正し、新機能を上乘せした。

そして、シリコンバレーのハイテク企業には、寄付文化がしっかりと根づいている。それだけではない。寄付文化が寄付者に「実利」をもたらすことも理解されている。清水氏は「シアトルのワシントン大学の図書館は、ビル・ゲイツの親族やポール・アレンなどマイクロソフトの創業者たちの名前の冠された図書館がいくつもある」という。

こうした文化が、IT起業家やIT企業を介して日本にも持ち込まれている。清水氏は、「日本でIT企業というと、利益至上主義のようなイメージもあるかもしれないが、プログラマやIT起業家はシリコンバレーとの交流もあり、ドネーションの習慣を受け継いでいる人はいる。何かしたい、実際に何かしているという社長も少なからず存在する」と語る。

それだけではない。IT文化とセットで持ち込まれた寄付文化が根づく土壌が日本社会にも存在していたようにも見える。冒頭で述べたように清水氏のかつての上司は、若い人間に経験を積む多くの機会をつくってくれた上、その恩は自分ではなく下の世代に返すようにと言ったそうだ。「恩送り」という言葉もあるが、日本的な価値観に、西海岸の寄付文化がうまく接合したと捉えることはできまいか。

たまたま、タイガーマスク現象を知った清水氏が、タイガーマスク現象を日頃の自身の体験や経験を背景としたコミュニケーション形式に接続したことによって、今まで誰も見たことがない寄付形態と寄付のインセンティブを生み出した。これがたった2ヶ月の間に行われたのである。

ところが清水氏には批判が殺到したという。今回のIT起業家とソーシャルメディアで関わることになったステイクホルダーはそれぞれバックグラウンドが異なっている。したがって、それぞれ関係者のコミットの動機はそれぞれである。「真の良心」「真の善意」のあり方を問うたとしても、背景を異にする多くの主体の間でインセンティブや、コミュニケーションの形式それ自体が異なっているため、一義の解を見出すことは難しい。善意の所在を問う議論や、現実の展開に目を向けることのない「薄気味悪さ」の主張は、新しい寄付と新手法創造に寄与することはない。むしろ「いかにして児童養護施設に、(新しい)寄付を実現するか」を問うコミュニケーションの接続を検証することで、それぞれの動機の差異を超えて実体あるアウトカムが産出したことを評価する必要があるのではないか。

中央共同募金会を介した寄付(赤い羽根共同募金等)が年々減少傾向にあることが象徴するように、近年日本から失われつつあると思われる寄付文化だが、アメリカ西海岸を経由して、一見、寄付から遠く離れて見えるIT起業家や周辺の文化、そして即時性、広い拡散性という特性を持つソーシャルメディアがもたらす創意工夫の連鎖が、日本社会に再び寄付文化を導入しようとしているという望観がすぎるだろうか。だが、伝統的な寄付手法が疲弊するなかで、意識的/無意識的にかかわらず、IT起業家と西海岸の文化を経由して、日本に寄付文化を持ち込もうとしている新しい主体とコミュニケーションは数少ない希望の萌芽として燦然と輝いてみえる。☺

このつづきは、早稲田文学ウェブサイトで3月下旬に公開予定! 清水氏の活動をもっと紹介、さらに熱い議論を展開します。お楽しみに!

早稲田文学編集室: www.bungaku.net/waseibun/

この連載では、毎号、執筆者が変わり、さまざまな話題をとりあげます。

がいご

げんしや

ちれき

さんすう

きゅうしよく

たいいく

かていか

こくご

としよ

HR

宇宙の謎に挑む
科学者
列伝

図書館横断検索サイト「カーリル」のレシピ機能。好きな本を集めてレシピをつくり、いろんなひとに届けることができます。ここでは、そのなかから、WB編集部クボキがピックアップ!



『僕らは星のかげら』
マーカス・チャウン
僕らの体、その一つ一つの元素はどのようにして出来たのか?



『宇宙創成 〈上〉』
サイモン・シン
宇宙創成の謎に挑み、ビッグバン理論に至る科学者たちの夢と苦闘。



『図説・宇宙科学発展史』
本田成親
天動説から最新理論まで
宇宙論の歩みを科学者とともに辿る。

自分の体が何で出来ているか、
宇宙の歴史、その謎が知りたい人にオススメ

学生時代、「水兵リーベ僕のフネ…」と元素周期表を暗記した人が多いかと思いますが、そもそもその元素はどうやってこの宇宙に生まれたのか、疑問に思いませんか? 宇宙はどうやって生まれて、どうして太陽は輝いているのか、疑問に思いませんか?
それらを解決してくれるのがこの本たちです。

r28さん
このレシピの URL
<http://calil.jp/recipe/8109304>

ある時はサーバ屋、ある時はプログラム屋。現在図書館の貸出カードは13枚所持。借りれるところは行きます。

古典の入門



『完訳 ギリシア・ローマ神話』〈上・下〉
トマス・ブルフィンチ
結局、神様もアホなんだよ。



『新訳 アーサー王物語』
トマス・ブルフィンチ
「聖剣」「聖杯」とかの言葉に反応しちゃう人は、ルーツを辿ってみて!



『シャルルマーニュ伝説』
トマス・ブルフィンチ
単純に、心躍る。
中世の騎士ロマンス。

読書好きな中学生～大学生にオススメ

19世紀の著述家トマス・ブルフィンチの本からあげました。実際に、僕が中学生から大学生の頃に触れ、歴史や世界に興味を持つきっかけのひとつになった本たちです。

読書は、新しい世界との出会い、そんな風に考える人もいるかもしれない。そんな人に、この本を読むことを提案してみたいな、と思います。

ゆるい読書会さん
このレシピの URL
<http://calil.jp/recipe/8180021>

読書をする時間・空間を共有し、ゆるく楽しむ読書会です。

ふわあ難しそう! でっかい宇宙とちっちゃい元素、どちらも人間のスケールからはかけ離れたもの。そこへの興味はどんなところから湧いてくるんだろう? やっぱ子どもの頃から好きだったりするのかしら。

この3冊は、そんな人にも楽しめそう。星と原子の謎解きにとりくんだ科学者たちに寄り添って書いている。なかには「彼女と星を見上げて「星が輝いている理由を知っているのは世界でただ一人、それは僕だ」なんてキザな台詞を吐いてプロポーズに成功した」科学者も! 偉大なんだか、へっばこなんだか、もうわかんない。

むつかしい数式もなく「易しく噛み砕いて書かれていたり、思い切って省略して事実だけが述べられていたり」するそう。科学を知りたい人にも、科学者が恋人でなかに考えているか知りたい人にも、きつとぴったり!



「カーリル・レシピ」で本を紹介してくれる人、大募集!

→「カーリル・レシピ」に登録すると、あるテーマの本を3冊以上集めて、書籍を紹介できます。テーマ設定は自由。レシピは3ステップで作ります。

①まず、オススメしたい人とタイトルを決めて、②本を3冊以上選び、③思い入れを書き込みます! 準備ができたらはじめましょう。

カーリル・レシピ URL <http://calil.jp/recipe>

「うちのオススメ (レシピ版)」では毎回、書かれたレシピの中から2つを選び、ご許可をいただいた上で紹介させていただきます。

「神々」「妖精」「エクスカリバー」…映画やアニメ、ゲームでときどき見かける言葉がならんです。神々の戦いと愛・嫉妬の時代から、騎士と魔法使いが活躍する冒険・恋愛ロマンスの時代まで、伝説がいっぱい。ファンタジー好きにはたまらない!

レシピの中心人物ブルフィンチくんは、神話や民間伝承を研究・著述してる人。読みやすくまとめられているみたいだから、はじめての人にもぴったりです。

それにしても、神様もアホなんだ。やっぱバケツ持って立たされたりするのかな? どんなことをしたのか、ゆるい読書会さんがどこを面白がったのかをもっと書いてくれると、読みたい人は増えると思うよ! 読書好きじゃなくても、マンガやゲームと地続きで読めそう。そこからさらに深く「世界を巡る探求」をつづけた人のために、もっとレシピを書いてくださいな。

本を借りるならカーリルで! <http://calil.jp/>

今日のカーリル

カーリル1周年、応援ありがとう! facebookの「いいね!」ボタンが押せるようになりました!

がいこ
げんしゃ
ちれき
さんすう
きゅうしよく
たいいく
かくこ
としよ
HR

草子ブックガイド 早稲田文学編 ④



玉川重機

開高健
寿屋(現サントリー)で数々の名コピーを生み出し、一九五八年第三八回芥川賞を「裸の王様」で受賞、一躍脚光を浴びました



その後、作品を發表する傍ら、この世の全ての酒を飲み、巨魚を釣り上げ、熊掌燕巢、世界の食を喰らいつくしたグルマン



そのために世界四三ヶ国を旅した、エネルギーッシュに「生きる」をした人

その「生きる」の傍らに、いつもいた道具達との出会いを書いたエッセイが「生物としての静物」です



イラストもいっぱい!



旅先で戦後に戦地で大河で開高さんはいたる所で「真正正器」のもと向かい合おうとします



開高さんが駆け抜けた時代「昭和」その頃の道具は単純明快でだから身体と心の奥底に染み込んでいったのかなと思ひました

この本で昭和の時代や戦後にしかなかった道具達を知るのも何か興味深かったです。よまされ「時代」を感じる一冊でした

バケモノや焼酎にカマルでコバク色をつけた「ウイスキー」という戦後のバケモノ酒。

開高さんホカロンに敬慕しています。最先端だったんですね!



開高健の会った道具たち

- 越中襦袢 (ふんどし) 重カと思。ウエーガー ナイフ
- カスライター 炭と煙の芸術を技術に変えぬと遊びを奪ってました。
- シケモク巻き器 戦後、街でひろく吸殻をほくして巻き直して吸った。
- パイプ シガレットは昼の道具。パイプは夜の道具。
- オムツライク 戦後、シケモクの巻き器に似た体にラネストライクの煙は細腕の足に塊惚がしめた。たていう。
- ベルト 使い古したベルトは痛ましく懐かしい。出来たらどこかにそよほま。老々年金でも出してやりたい。
- オムツライク 戦後、シケモクの巻き器に似た体にラネストライクの煙は細腕の足に塊惚がしめた。たていう。
- モスキーコイル アラスカの虫(ムスガ)何巧でもたがられ死んでしまう
- 人形、手釣り 何が先で何が途上か。運動、遠形、構装、ムダのない機能美が現代差の理想なら原始的な手釣りこそそれがある。

「生きる」を愛する人は、使われ捨てられるほど、めまぐるしく新しい道具が出てくる今、それだけの人が道具に愛されてるのだろうか

開高さんが道具達に愛されたのは喜びも悲しみも希望も絶望も

「生きる」を愛する人は、使われ捨てられるほど、めまぐるしく新しい道具が出てくる今、それだけの人が道具に愛されてるのだろうか

悠々として、急げ

人生の同行者「道具」達から愛されるような同行者があった「私」

「生きる」を愛する人は、使われ捨てられるほど、めまぐるしく新しい道具が出てくる今、それだけの人が道具に愛されてるのだろうか

「草子ブックガイド」の新作は6月発売の「モーニング」に2週連続で掲載予定。草子が今度読むのは漂泊の歌人、西行です。お楽しみに!

がいこ げんしや ちれき さんすう きゅうしよく たいいく かていか くとく としよ HR

キヨウの料理 2

「子をつれて」より「子とともに」

キヨウミナヲ

Kyo Minawa

カフエヤバーで経験を積み重ね、料理のみならず、小説・エッセイも手がける料理人。身近な食材をつかった、気どらないにお洒落なレシピに魅了される女子多し。その毒舌は、効きすぎるスパイスとして、一部に中毒者がいるのだとか。

(……) 自分は少し贅沢な生活を望んで居るのではない、大した欲望を抱いて居るのではない、月に三十五円もあれば自分等家族五人が饑えずに暮して行けるのである。たったこれだけの金を器用に儲けないという自分の低能も度し難いものだが、併したったこれだけの金だから何処からかひとりで出て来てもよさそうな気がする。彼にはよくこんなことが空想されたが、併しこの何カ月も、それが何処からも出ては来なかった。何処も彼処も封じられて了った。一日々々と困って行つた。蒲団が無くなり、火鉢が無くなり、机が無くなった。自滅だ――終いには斯う彼も絶望して自分に云つた。

(……) 彼等は、電車の停留場近くのバーへ入った。子供等には寿司をあてがい、彼は酒を飲んだ。酒のほかには、今の彼に元気を付けて呉れる何物もないような気がされた。

(……) 「お父さん、僕エビフライ喰べようかな」 寿司を平らげてしまつた長男は、自分で読んで、斯う並んでいる彼に云つた。

「よし〜、……エビフライ二〜」 彼は給仕女の方に向けて、斯う機械的に叫んだ。

「お父さん、僕エダマメを喰べようかな」 しばらくすると、長男はまた云つた。

「よし〜、エダマメ二〜」それからお雛子……」 彼はやはり同じ調子で叫んだ。 (富西善蔵「子をつれて」)

蒲団が無くなり、火鉢が無くなり、机が無くなって絶望の淵に追いやられているのに、現実的な対処法を考へるでもなくただ不安に胸をどきんどきんさせて、友人に50銭1円といった金を借りに日参し、大家には怒られ、金持ちの邸宅をうらやましそうに眺め、恐い大家をなんとかしてもらおうと警官の知人を訪ねれば逆に説教され、終いには家を追い出されてしまいます。 今度こそ現実を目を向けるかと思えば、なげなしの台所用具を売った金を持ってバーへ行き、たった半頁のあいだに寿司、酒、エビフライ、エダマメ、また酒……なんて注文。書いてないけど、お会計はいくらだったの？ 路頭に迷つた父子はこのあとどうなるの？ 子供らもバーでは食べる以外にすることも無いわけで、だったら若いエネルギーは調理に向けてもらい父子と一緒に料理をしましょう。「酒のほかに元気を付けて呉れる何物もない」のもわかつた！ だったら酒の肴も作ればいいじゃないか。 というわけで秋刀魚だけを使った親子のレシピです。秋刀魚に含まれるDHAは頭を明晰にし、ストレスを緩和します。



秋刀魚料理2種

◎子 秋刀魚ごはん

【材料】

秋刀魚、米、細ねぎ、だし、塩。

【つくりかた】

米を研いでおきます。秋刀魚はワタを抜き(ワタは親料理で使います)、塩をふって魚焼きグリルで焼きます。だしを加えたお米のうえに、塩焼きした秋刀魚(親メニューで残つた頭と骨も)をのせて炊きます。

◎親 秋刀魚のワタ焼き

【材料】

秋刀魚、みりん、しょうゆ、酒。

【つくりかた】

秋刀魚は三枚におろして、残つた頭と骨は子メニューの秋刀魚と一緒に焼きます。ワタ(子メニューで余つたワタも)はみりん、しょうゆ、酒と和え、三枚におろした秋刀魚の身を適当に切つて30分ほど漬けます。漬けた秋刀魚をグリルで焼きます。ひっくり返す際に余つたワタを塗つてもよし。



がいこ げんしゃ ちれき さんすう きゅうしよく たいいく かていか かくこ としよ HR

わたしたちの体育

青木 淳悟

Aoki Jungo

第2回 プラトン『ラケス』を斜め読み!

79年生。前衛的な作風でディープな読者の多い新進小説家。『このあいだ東京でね』は東京という「都市」が主役の奇妙な話。待望の長篇「私のいない高校」(『群像』11年2月号)はカナダから来た女の子ナタリー・サンバートンが登場する一味(以上)違った学園もの。

【参考文献】『プラトン対話篇 ラケス——勇気について』
プラトン/三嶋輝夫訳(講談社学術文庫)

《リュシマコス ニキアスさんとラケスさん、これであなた方は、あの男が重武装をして闘うところをご覧になったわけですか。…》

重装武闘術というものの演武を、いい大人が4、5人集まって見物、そこから始まる冒頭部からして意外の感に打たれる——当時(紀元前420年前後!)の体育競技のようなものを見てから議論を始めようという状況がまず我々の関心と呼ぶし(そう、体育である)、このあと読んでいくと分かるが、そこに居合わせている二人はアテネ(アテナイ)の著名な将軍なのである。「息子に体育させるべきか否か?」といったことを長々と彼らに問い掛けているのが老齢のアテネ市民リュシマコス。登場人物表には他に、メレシアス老人とそれぞれの息子たちが出ているものの、実質番目はほとんどない。ここで押さえておくべき人物は、書名にもなっているラケス将軍にニキアス将軍、それに議事進行役のようなソクラテスくらいである(冒頭の「あの男」がソクラテス本人だったら楽しいだろうが、当人物はあとでラケスによってこき下ろされるただの脇役。その滑稽なエピソードは23頁あたりで披露されることだろう。ちなみに設定年代における彼の人の推定年齢は50歳前後だという——「ソクラテス」「ソクラテス」とみなに尊敬されつつもなぜかいつも呼び捨てにされる男)。

冒頭でこのような人物たちを前にして話し出される内容が息子の教育相談であるところにある種の「くだらなさ」を覚えてグッときてしまう。当時はペロポネソス戦争のまっただなか、かかる国事多難の時にありながら、彼らは何と悠長に話し合っていることだろう。当事者たちは至って大真面目なのがまたユーモラスでもある。この体育についてと、他にも何かおすすめの学科はないかということで、ごく私的な相談が二人の将軍に持ち掛けられて議論の幕開けとなり、やや遅れてソクラテスがいよいよ乗り出してくる。

《ソクラテス …それ(誰が体育を教えるのにふさわしいか)は体育を学んでそれを修得した人ではないでしょうか。そしてその人には、その科目そのものに関するすぐれた先生たちもいたような人ではないでしょうか》

ところで当初は学科としての体育や体育教師の選定について実際的な意見を述べ合っていたはずが、対話はソクラテスの徹底的な論理的追求によって「徳」の考察へと進む。すなわち「勇気とは何か?」「徳の一部分としての勇気の定義」が本対話篇の主題となる。しかしそうした論点もさることながら、この作品は登場人物の「台詞回し」がいちいち面白い。プラトン対話篇という難解そうだが親しみやすい場面が多々ある。

そのうちのひとつとしてまず読み落とせないのは、相談を受ける二将軍それぞれの人柄と「仲の悪い同僚」としての悪口めいたやりとりであり、

それが互いの発言を通してありありと描き出されていくところだ。勇将ラケスは知将ニキアスに対して挑発的に振舞うこと度々である。最初の発言「いやまったく君の考えている通りだよ、ニキアス」からして何か含みがあるようだし、ニキアスが重装武闘術を習うことの有益性をひとしきり述べたあとでは、「いやニキアス、どんな学科についてであれ、それを学ぶべきでない」と主張することは実に難しいことだね。というのも、何でも学び知ることはいいことのように見えるからね」などと反論を開始し、彼は教師たちがそれをまともな学科であるように見せ掛けているだけだと主張する。

そして議論が進み勇気について定義する段になると、この勇将は開口一番こう述べる。《ラケス ソクラテス、ゼウスに誓って、それを言うのは少しも難しいことではないよ。というのも、誰かが隊列に踏みとどまって敵を防ぎ、逃げ出さないとするならば、いいかね、その者は勇気があるのだ》。これに対してソクラテスが、勇気の例示的な解釈ではなくその本質は何かと問い直すと、《ラケス もし、あらゆるものを貫く勇気の本質といったものを言わなければならないとするならば、僕にはそれは今や<心の何らかの忍耐強さ>であるように思われる》。

このあとを受けたニキアスは、勇気を「恐ろしいことと平気なことについての知識」だと定義するが、これに対するラケスの反応はといえば、「なんて突拍子もないこと」「知は勇気とは無関係」「彼はたわごとを言っているのだ」などと辛口に評して一蹴しようとする。「けなすのはやめようではありませんか」とソクラテスが取り繕おうとすれば、《ニキアス それには及ばないよ、ソクラテス。むしろ私には、ラケスが、私もまた無内容なことを言っているということが明らかになればいいと思っているように思われるのだ。というのも、彼自身がまた何かそのような者であることが、今しがた明らかになったばかりだからだ》。

どんな結論に至るかは本書に委ねたいが、将軍たちの嫌味合戦はこのあと「エピローグ」まで尾を引く。彼らの言動に見られるようにあくまで人間的な部分が所々で顔を覗かせる。ギリシャ時代のアテネで、どれほど理知的な弁舌が振るわれるのかと思えば、むしろその敷居の低さに驚愕してしまった。

作品自体はそれほど長いものではないし、本対話篇は「プラトン初学者向け」とも目されているくらいで、議論の流れが文中の小見出しによって整理されているなど、構成上の配慮もあって非常に読みやすい。また巻末に付された解題にはあらずと論点が詳しくまとめられている。さらにはここに登場する歴史上の二将軍とソクラテスのその後の運命(巻末「関連略年表」を参照)までを知ると、事実の重みがグッと胸に迫る。それにしてもこれらの対話を解釈することにどんな意義があるかは何度読んでもよく分からない。しかしこの異なる時代、異なる世界でのやけに熱意のこもったやりとりには不思議と心を惹かれる(大好きな1冊です!)。♫

「自宅に眠る本を、手助けに。」

バリューブックスでは、古本のリユースにより、社会貢献を行っている複数のNPOなどの団体を支援するプロジェクトを多数行っております。ご自宅で不要になった古本をバリューブックスにお送りいただくだけで、その買取相当額がご指定のNPOなどの団体に寄付されます。

<http://www.valuebooks.jp/>

たとえば、あなたが支援できる事。※一部抜粋

- ・将来へ希望を見いだせない環境にある若者への自立・就労支援。
- ・ブラインドサッカーによる障害者と健全者の交流活性化支援。
- ・難病と取り組む仲間を応援するイベント開催の支援。
- ・自閉症がある子供たちとその家族の支援。
- ・明日の日本を支える東京大学の教育・研究の支援。 ※詳細はVALUE BOOKSホームページをご覧ください。
- ・日本の未来のコンテンツ産業を担う若手漫画家の支援。 ▶ <http://www.valuebooks.jp/>

お申し込み方法

- 1、各プロジェクトサイトより申し込み書をプリントアウト。必須事項を記入して下さい。
 - 2、本を詰めたダンボールに申込書を入れて梱包する。
 - 3、0120-826-295 に電話して、後はヤマト運輸の集荷を待つだけです。
- ※5点以上で送料無料(本以外にも、DVD・GAME・CDも可能です。)
※対象となる商品は、ISBN番号、もしくはバーコードが記載されているもの。

株式会社バリューブックス

〒386-0041 長野県上田市秋和537 古物商免許:長野県公安委員会第481100800018号 ●お問い合わせ TEL:0120-826-295 E-mail:info@valuebooks.jp

げきからぶんがくにゆうもん

Mochizuki Shunjun

68年生。主として国内外の小説・演劇について「朝日新聞」「ボンツーン」等で望月旬義の書評を手がける。著書に『日本文学にみる純愛百選 zero degree of 110 love sentences』（共著）。超がつくほどの辛い物好きで、職場にはカレー部があるとのウワサも。

つぶやきシローさんの小説『イカと醤油』は、バカボンのパパみたいにデタラメな論理でいつも狡く辛くふるまう父親と、そんな暴君にふりまわされながら健気に生きていく一人息子とがくりひろげる悲喜劇。日常茶飯事をめぐるピミョーな観察力は、「あるあるネタ」が得意なお笑いタレントならではのもの。

タイトルについて解説するとネタバレになってしまうから140字でまとめるとしたら以上のような感じになるけれど、つつこみどころ満載の作文として楽しめる『イカと醤油』には、超ユニークな偽18段変速ギアの自転車（その名も肉の吉川号！）が登場して話を盛り上げ、あることに気づかせてくれるといったセールスポイントが、ある——小・中学生が主人公の文学作品は、親が子どもに自転車をプレゼントすると、決まって、感動的なムードが高まるね。

子どもにとって、自転車とは、自分の世界を広げる冒険のために必要な「愛車」（＝相棒）にほかならない。

というわけでして、今回ご紹介する本は、竹内真さんによる『自転車冒険記 12歳の助走』。マウンテンバイクに乗って「一人旅」をする少年と、その父親との心の軌跡をたどる、リアル&さわやかなサイクリング小説だ。

著者が手がけてきた自転車少年記シリーズの続編にあたる作品で、その美味しいところが、ギュッと詰め込まれている（かつての自転車少年たちは親になって、その子どもが活躍しはじめるので、親離れ&子離れというテーマを隠し味に、親子それぞれの目線から珠玉のせつなさが語られている）。青春小説の大傑作『カレーライフ』では「おでんカレー」という驚きの絶品料理を発明した著者だけに、今度は、どんな食べ物か飛び出すかと思いきや——サイクリングの話だから栄養補給食としてのパワーバーやスポーツドリンクが基本。コンビニで買うカップ麺とか、〈何かやろうとしている時にとりあえず食べている姿がカッコよく見える〉ものばかり。みごとな「食事の哲学」につらぬかれている。

北斗七星にちなんで名づけられた12歳の少年・北斗君は、学校では中学受験しない派だけど小惑星探査機「はやぶさ」について誰よりも詳しく、宇宙や星の話が大好き。知らない道を切り開いてみたり、野宿してみたり……「冒険っぽい」ことにあこがれるロマンチスト。そんな彼が、小学校卒業の春休みに、「無茶な自転車旅行」にチャレンジする。

東京から大阪まで長距離ドライブするというので、目標は一日に百キロ走破！単純計算で五〜六日あれば行くことができる距離だけど、この数字に北斗君がこだわるのには、もうひとつ別の理由があった——空に向かって百キロ進めば標高十万メートル、そこはもう、流星やオーロラの輝く世界だから。

この本が素晴らしいのは、〈小学生でも中学生でもない〉少年時代のひとときを切り取って、そこに宇宙までの距離が体感できるような物語の仕掛けをほどこしているところだ。

また、ここ数年でブームになったtwitterを、作品の中にじつに効果的にとりいれている。GPS機能付きの携帯電話からの「つぶやき」やブログの更新が、うまくおりこまれ、物語にとびきりの臨場感を与えている。地形の高低差も体感できる「冒険の書」として、RPGさながらの面白さもあるし（ボーナスステージは、しまなみ海道。そこで「ドラゴン」と出会うラストシーンも素敵だ）。

「内堀通りを外れて1号線なう」が、北斗君の記念すべき初ツイート。いわゆる東海道五十三次の起点としても知られる日本橋から国道一号線に出て、中原街道、国道二四六号線、西湘バイパス、真鶴道路を進んで、熱海へと向かうんだけど……ワンボックスカーで伴走してくれた父親の、〈俺たちはどっちも、少し冒険ってもんを甘く見てたんじゃないかな〉という台詞にたどりつく。

現実には厳しく、辛いときもある。でもそう思えた瞬間が、「成功の始まり」なんだよね。

とても爽快な読後感の本書で、人生の経験値をあげてみないか？

ロングセラー8刷！

新宿駅最後の小さなお店ベルク 店長 井野朋也

究極の大衆飲食店はこうしてできた！

そのノウハウを書いた本。ユニークな経営術がわかる。個人店が生き残るには？

定価●1,600円＋税
ISBN:978-4-86020-402-0
ブルース・インターアクションズ
http://bls-act.co.jp/

●ベルクから生まれた本

食の職

小さなお店、ベルクの発想

愛される「味」「仕事」を生み出す秘訣とは？

食と仕事についての美味しい本。ベルク第2弾は職人VS経営者！

副店長 追川尚子

コーヒー ¥210
生ビール ¥315

Beer & Cafe
BERG
ベルク

☎ 03-3226-1288
http://www.berg.jp
↑ベルク通信、全バックナンバーがご覧いただけます。

JR新宿駅東口改札出ですぐ
(ルミネエストB1)

WB常設。コーヒーのお供に。

万人以上がベルク立ち退きに反対署名！詳しくはベルクブログ (<http://mondabu.exblog.jp/>)

数学への長い道

第2回 数読み

円城塔 EnJoe Toh

72年生。大学で物理を研究していた理系作家。あなたの身近な後藤さんから銀河の彼方の帝国まで、あらゆるものを語ってみせる“大ぼら吹き”。作中にちりばめられた仕掛けがいつも読者を遠方に暮れさせる。『鳥有此譯（うゆうしたん）』で、第32回野間文芸新人賞を受賞。

ばーん。

$$\frac{e^{-\frac{\pi}{5}}}{1 + \frac{e^{-\frac{\pi}{5}}}{1 + \frac{e^{-2\pi}}{1 + \frac{e^{-3\pi}}{1 + \dots}}}} = \frac{1}{8}(3 + \sqrt{5})(\sqrt[4]{5} - 1) \left\{ \sqrt{10 + 2\sqrt{5}} - (3 + \sqrt[4]{5})(\sqrt[4]{5} - 1) \right\}$$

と、陽気にご機嫌など伺いまして第二回です。

数学っぽいことを語るはずのこの連載ですが、なかなかそれ風なことをはじめないのにはわけがあります。書いている本人がわかっていないからだ！ という事情はともかくとして、数学っぽいって何よという話です。

説明とは何か、という話なのです。何かパズルをもってきまして、その背後にある数学っぽい仕組みを解説するとか、それはできます。実際、第四回目くらいに予定しているわけなのですが、それって数学っぽい？ というのが今回の問いです。

わかりやすい解説は、時に数学とは何の関係もなかったりします。

その式なり定理というの、これこれこういう意味である、と噛み砕いて解説したからどうなのだ、ということでもあります。数学の強みというの、(まあ色々細かいところはあるのでしょうが)形式的な頑丈さです。ひょっとすると意味内容さえ横に置いて話を進めることができたりするのが強みなのです。

チェスの駒は象牙だろうがプラスチックだろうが構いませんし、将棋の駒でチェスをやっても構いません。人間チェスなどを考えてみて、壮大なドラマを付与することもできるのですが、チェスの方ではそんなことなど気にしません。ルールさえ共有されているなら、手紙に書かれた「郵便チェス」の一手だってチェスとなります。

ということは、あなたが目にする解説は、様々許されている解釈のひとつにすぎないのかも知れないとそういうことに相成ります。むしろ解説を目にするだけで、わかった気分になってしまって、別の読み方を殺しているという可能性だって生まれるわけです。

数学的文章を読む際に必要なのは、首尾一貫した読解力です。一貫しており、他の人にも伝達可能な理解であれば、ずらずら並ぶ記号の読み方はどんなものでも構いません。

たとえば、 $\frac{3}{2}$ を考えましょう。3つの蜜柑を2人で分けたんだよねと、それはひとつの読み方です。 $\frac{3}{2}$ に2を掛けることを考えてみましょう。分母が消えて3が出てきます。ということは、 $\frac{3}{2}$ という

数字を、2を食べて3を吐き出す関と「読む」のも自由なのです。「 $\frac{3}{2}$ 」を「にぶんのさん」と読むのは所詮、人々の間の決め事なので、「函」をみて函を思い浮かべてみるように、「 $\frac{3}{2}$ 」で数字を食べる函を想像するのも勝手です。

そこに $\frac{3}{2}$ という関があると考えると、 $2^3 \times 3^4$ を突っ込むことを考えてみます。 $2^3 \times 3^4$ とは、2を3回掛けたところに、3を4回掛けた数です。 $2 \times 2 \times 2 \times 3 \times 3 \times 3 \times 3$ と書くのは面倒なうえに読みにくいのでこう書きます。函を1回通って、2が1個減り、3が1個増え、 $2^2 \times 3^5$ が出てきます。2という食べ物なくなるまで同じ操作を続けると、 3^7 が出てきます。

だから何かといいますと、数字の右肩の上に乗った数字を眺めて下さい。

$2^3 \times 3^4$ が 3^7 になりました。こいつはつまり、 $2^a \times 3^b$ という数字を、 3^{a+b} という数字へ変換する操作なのです。

つまり、 $\frac{3}{2}$ は、足し算を行う超絶単純コンピュータだと考えることもできるわけです。

はい？ と首を傾げた方は、ここまでのなりゆきをもう一度眺めて下さい。そんなの当たり前じゃんという方や、そんなのはただの頓智だと言われる方は、fractranを調べてみて下さい。分数を使って、わたしたちが普段使うコンピュータを作ることは、原理的に可能だったりするのです。

分数をコンピュータとして読むとか、理解するとかってというのは何？ という気分になって頂ければ幸いです。

冒頭の式について若干。これは、Rogers-Ramanujan continued fractionと呼ばれるものの一例で、「黄金比の連分数展開のq-アナログに、円周率 π を突っ込むと代数的な数が登場したりする」という驚異的な結果を述べるのですが、こうした解説は何か心を湧き立たせそすれ、説明とは通常呼ばれません。

式の形だとか来歴だとか、それを考えた人物の経歴だとかも確かに面白い場合があるのですが、まずは論理的な展開を虚心に眺めることが、数学的な営みのはじまりであり、そこから新たな読み方を見出すことが、数学的な営みの第一歩であったりします。公式を適用することが数学するというのではないし、公式の使い方を示すことが数学するというでもないわけなのです。数学を行う能力の一部は、自由に読む能力からできています。

さて、この連載は、何を解説するべきでしょうか。

評論
古谷利裕
「夢の場所、フレームの淵」

対談
町田康×朝吹真理子
「わけのわからない」を読む」

座談会
浅田彰・松浦寿輝・渡邊守章
「ハイブリッドなマラルメ」のために」

翻訳
ウラジミール・ソロキン「青脂Ⅱ」
クロード・シモン「農耕詩Ⅲ」

詩
川上未映子
「誰もがすべてを解決できる」と思っていた日」

4号まで待てない！
臨時増刊「3.141592653…」号。
文学への愛と希望に満ちた
464頁の大ボリューム！

大好評発売中!!
定価●1,280円(税込)

早稲田文学 増刊 Ⅱ

「わりきれないおもしろさ」号

発行・発売 ● 早稲田文学会
お問い合わせ ● ご注文先
TEL・FAX 03-3200-7960

がいに
げんしや
ちれき
さんすう
きゅうしよく
たいいく
かていか
こくご
としょ
HR

つぎどき

行くの？

江南亜美子

人口や面積や平均気温といった数字は、その土地のムードをなにも教えてくれない。小説作品を読み、自室に居ながらにして彼の地の空気を味わったなら、つぎは書を持ったまま、その町に出たい。

第一回 ● いび、苦い恋の似合う鎌倉へ

みる 1 北鎌倉

東京を出てJR横須賀線の電車に揺られて小一時間。北鎌倉駅に降り立ったなら、そこはすでに円覚寺の境内である。夏目漱石『門』で主人公・宗助が、親友の妻を自分のものにしてしまった罪の意識から救いを求めて参禅する寺のモデルといわれる。

〈山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮っているために、路が急に暗くなった。その陰気な空気に触れた時、宗助は世の中と寺の中との区別を急に覚った。静かな境内の入口に立った彼は、始めて風邪を意識する場合に似た一種の悪寒を催した〉
宗助も見上げたかもしれない山門はたしかに重厚。世間に背き、妻と二人きりの生活を選んだ彼の暗さが迫体験できる。ちなみにそこから左手に見える松嶺院では、有島武郎が長逗留して『或る女』の後篇を書いた。「新しい女」として、自分の欲望といくつもの恋に正直に生きた女・葉子のかなしき最期。円覚寺に苦悩はじつにお似合いなのだ。

みる 2 鎌倉

北鎌倉から一駅先の鎌倉駅では、恋愛の情熱にか

られた女性の足跡をたどることになる。倉橋由美子『暗い旅』で失踪した恋人を探す「あなた」は、東京駅から突発的に真冬の鎌倉駅までやってきた。

〈若宮大路をくだつてきた小型タクシー、赤煉瓦色のニュー・コロナをとめる。材木座のほうへ、とあなたはいう。『材木座のどの辺です？』『海のみえるところまで』『海岸橋のあたりでいいですか？』『そこから左へはいつくください』あなたはすこし芝居がかつている。だれもタクシーに乗つてそんないかたはほしくないだろう〉

主人公を「あなた」と設定、七年に及ぶあなたとミチヲとの自他の境のない恋愛を、鎌倉から京都までの旅のあいだに回想してゆく二人称小説に、一九六〇年代以降の女子たちは魅了された。この高級な恋！このベタテンティスム！それから半世紀、当時の倉橋と同年代の作家によって、鎌倉の隣町（の隣町？）の葉山を舞台としたハイブラウな芥川賞作品が生まれたのは、偶然か、それともなにかの符合か。

みる 3 由比ヶ浜

鎌倉駅から横須賀線で葉山方面に向かうのではな



泊まる 乱橋の妙長寺

夏の夜、下宿する鎌倉の寺を出てふらり由比ヶ浜まで散歩に出た男に、やがてゆえなき恐怖の感覚が襲う。一〇代限定のお宿は、土地の暗さと若さゆえの不安感を楽しんで。

〈ト枕を並べ、仰向けになり、胸の上に片手を力なく、片手を投げ出し、足をのばして、口を結んだ顔は、灯の片影下になつて、一人すやすや寝ているのを、……一見すると、それは自分であつたので、天窓から水を浴びたように筋がしまつた〉

泉鏡花「星あかり」（『高野聖』所収）より

食べる 二楽荘のシウマイ



戦時下、玩具会社の重役夫人の家で女中をつとめたタキが隠した、奥さまと若きデザイナーとの恋。その第一直感シウマイの香りとともに。

〈わたしは奥様とぼつちゃんを駅に残して、お土産を買いに小町通りのほうへ行つた。そうして、おいしそうな匂いをさせている大きな白いシウマイを包んでもらつて、駅まで戻つてくると、ぼつちゃんと奥様が誰かと話をしていた。それが、二週間前に社長さんの別荘でお会いした板倉さんだとわかるまでに、少し時間がかつた〉

中島京子『小さいうち』より

着る 肩にボタンのついた緑の水着



日本が誇るロリータ小説において、譲治は数え年15歳のナオミの身体つきを、遊びに行つた鎌倉ではじめて目にして興奮する。のちに彼女の決定的な不貞を同じ場所で見つかる。のちに彼女も知らずに。

〈彼女が始めて由比ヶ浜の海水浴場へ出かけて行って、前の晩にわざわざ銀座で買って来た、濃い緑色の海水着と海水服とを肌身に着けて現れたとき、正直なところ、私はどんなに彼女の四肢の整つていふことを喜んだでしょう。そうです、私は全く喜んだのです〉

谷崎潤一郎『痴人の愛』より

く、情緒ある江ノ電に乗って由比ヶ浜駅に着いたなら、鎌倉文学館を目指そう。三百円程度の観覧料で、この地を愛した、明治から昭和にかけての多くの『鎌倉文士』たちの足跡を知ることができる。それだけではない。この、もとは前田利家の系譜の別邸だった洋館は、ひとつの悲恋の記憶をとどめている。三島由紀夫『豊饒の海』の第一部『春の雪』において、貴族である清頭はこの館と庭つたいの由比ヶ浜の間にまぎれて、聡子との禁断の恋の逢瀬を楽しんだのだ。

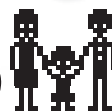
〈誰も見えない筈なのに、海に千々に乱れる月影は百万の目のようだった。（略）かれらを取り囲むものすべて、その月の空、その海のきらめき、その砂の上を渡る風、かなたの松林のざわめき、……すべてが滅亡を約束していた〉

古都鎌倉の町なみに、デカダンなんて言葉が浮かんで消えていく。どこか影の残る恋、成就しなかつた恋の亡霊がいまも徘徊しては、自分たちの仲間を増やそうと狙っているかもしれない、鎌倉。風光明媚なこの地をデートで訪れる際は、すさまじく注意したい。

『社会』の思考

大澤真幸

Ohsawa Masachi



『自由の条件』や『ナショナリズムの由来』など、社会構造の観察と本源的理性への思考を総合する思考を繰り返して続ける社会学者であり思想家。同時にスポーツや文学の批評も手がけるなど、フィールドを横断した活躍をみせている。毎月多彩なゲストを迎える月刊個人誌『THINKING O』を左右社より刊行中。

第2回 闘争なき格差——芥川賞の二人

第一四四回芥川賞の受賞者二人——朝吹真理子と西村賢太——の極端な対照性が話題になっている。芥川賞を二人が同時に受賞するのは、七年ぶりのことである。この度の二人は、どのように対照的なのか。簡単に言えば——誰もが直ちに気づくことだが——、二人はそれぞれ、日本の階級社会の最上層と最底辺を代表しているのだ。朝吹真理子はおそらく、日本社会で望みうる、ほぼ最高の生まれと育ちの持ち主だ。西村賢太は、逆に、犯罪者の父をもち、貧困にあえぎ、学歴もないのだから、生まれの点でも育ちの点でも、最低であると言わざるをえない。

作者たちが対照的なだけでなく、彼らの作品の内容もまた、こうした階級格差を端的に表現している。西村の『苦役列車』は、三畳一間のポロアパートに住み、日雇いの港灣人足仕事で何とか生計をたてている十九歳の少年を主人公としている。朝吹の『きことわ』は、子どもの頃に仲がよかった二人の女性、貴子と永遠子が、葉山の別荘で二十五年ぶりに再会する話である。毎年夏を葉山の別荘で過ごすことができる者が、そうとうに裕福であることは言うまでもない。

興味深いのは、両者の言葉に対する態度もまた対照的なことである。西村は私小説だけを書きたいという。逆に、朝吹は、嘘だけが真実だと語っている。つまり、自分についての事実だけが真実になる西村と、まったくの嘘（作り話）しか書かない朝吹という対比を得ることができる。

しかし、これだけ明白な階級格差を見せつけられると、われわれは、ここに、当然あってしかるべき何か決定的なものが欠けていることに気づかざるをえない。何がないのか。あえて率直に言おう。階級闘争である。

*

『きことわ』は、「永遠子は夢をみる。貴子は夢をみない。」で始まる。だが貴子も夢と無縁ではない。いや、むしろ貴子は、永遠子以上に夢と密着している。この小説によれば、貴子が夢を見ないのは、ある意味で、貴子自身が夢の中の登場人物だからだ。貴子は夢と一体化しているのである。

つまり、この小説では、夢と現実が交錯しており、どこからが夢や幻覚や記憶で、どこからが現実なのか、判然としない。というより、現実もまたひとつの夢（＝嘘）として提示されているのである。主人公の二人は、多層的な現実の間を——夢や現在の現実や記憶や幻覚やカンプリア紀の間を——自然と行き来する。ここにあるモチーフは、多様な現実の、すなわち差異の共存である。

どうして差異が問題なく共存できるのか。この疑問は、『きことわ』にも、よく見ると、階級闘争へと発展しうる小さな芽があることを考慮に入れることで、解くことができる。裕福さのシンボルともいうべ

き、葉山の別荘は、貴子の家族のものであり、永遠子は、そこでの使用人の娘なのだ。つまり、両者は言わば労使の関係にある。が、無論、二人の間に、いかなる葛藤も生じない。二人の間の利害の相克は否認され、差異は十分に小さく見積られるからだ。つまり、差異の共存を可能にしている要因、それは差異の緩和である。かくして「きことわ」の対立は、「きことわ」という形式で融合することができる。

こう考えると、『きことわ』にどうして階級闘争が宿らないのか、その原因が明白になる。階級闘争とは、(ブルジョワジーとプロレタリアートの間の) 差異を強化し、葛藤状態にまで先鋭化することを通じて、逆に差異を消去すること(階級の消滅をもたらすこと)だからだ。「差異の強化→差異の消滅」という展開が階級闘争であるとすれば、「差異の緩和→差異の共存」という論理が『きことわ』を支えている。

しかし、見ようによってはプロレタリア文学とも解せないこともない『苦役列車』には、階級闘争があるのではないかと。確かに、この小説には、階級闘争へと繋がりうる関係性と感情を見出すことができる。主人公貴多は、同じ日雇い労働者で同年齢の日下部に好意をもち、彼と親しくなるが、同類だと信じていた日下部が、やがて、貴多とは違って、意外と豊かな中流家庭の出で、有名大学に通う恋人までもっていることを知り、一転して、日下部に激しい嫉妬と敵意を抱くようになる。ここに、階級闘争の前提となる、(階級の) 差異の先鋭化、差異の徹底化に繋がりうる、関係の変容が萌している。

そして、階級闘争と同様に、この小説も、差異の消滅、差異の撤廃へと至る。が、しかし、『苦役列車』における差異の消滅は、階級闘争におけるそれとは、まったく反対を向いているのだ。階級闘争において差異が最終的に消滅するのは、差異＝関係が全体的に再編成され、差異の原因となる敵対性が解消されるからである。しかし、『苦役列車』は、まったく逆である。

この小説で、うるさいほど繰り返される言いまわしは、「(貴多は) 根が…にできている」という表現である。関係に葛藤が孕まれたとき、その原因は、常に、貴多自身の本来的で不変の負の性質へと——いわば開き直って——帰せられるので、関係が変容したり、再編成されたりする可能性はまったくない。差異(葛藤)は、最終的に消滅するが、それは、差異＝葛藤が深まりすぎて、貴多と他者(日下部たち)との関係が、つまり付き合いが、消滅してしまうからである。敵対性は温存される——あるいは深化されさえする。こうして、底辺のプロレタリアートの日常を描いた『苦役列車』でも階級闘争は描かれない。『きことわ』と『苦役列車』。二つ合わせて、階級の極大の格差が描写されながら、そこでは、階級闘争だけが回避されているのである。

短編競争「変身」
入間人間 福嶋亮大 坂上秋成
木堂権 伊藤亜紗 渡邊大輔
間宮緑 井上明人 泉信行
小林里々子 評論 コミュニティの行方
佐藤弘 西田亮介
エッセイ 内沼晋太郎
松田青子
川崎昌平
表紙マンガ 今日マチ子 ユーサン
発行・発売 早稲田文学会

WSJEDA bungaku
早稲田文学
3

創刊 村田沙耶香 中村文則 墨谷涉
小野正嗣 松田青子 木下古栗
翻訳 ウラジーミル・ソローキン「青脂」
クロード・シモン「農耕詩」
第23回早稲田文学新人賞発表
選考 東浩紀 受賞作 青沼静哉
「ほか」

特集 ● コドモの文学
ダブル対談
重松清 × 金原瑞人
× 西原理恵子
斎藤環 斎藤美奈子 伊藤剛
千野帽子 伊藤比呂美
評論 桂秀美 武田将明 石川義正
古谷利裕 大杉重男 神山修一
ふるくDVD 聖家族 voice edition
古川日出男 ほか

◎ 好評発売中 ◎

定価 ● 980円(税込)

定価 ● 1800円(税込)

増刊 U30
2010年代を担う新しい才能が集結!

前号から1年、さらにボリュームアップした本誌「早稲田文学」がついに登場!

がいこ
げんしや
ちれき
さんすう
きゅうしよく
たいいく
かていか
こくこ
としよ
HR



世界の言語を訪ね歩く 第1回

ウォロフ語と「文学」

砂野幸稔
Sunano Yukitoshi

54年生。全世界で現在話されている言語のうち、30.3%を占めているアフリカ諸国のことばと、社会の問題を論じた『アフリカのことばと社会』（共著、本編で語られるセネガルの複雑な言語生活から、言語的多様性と社会的共同性がいかにして両立しうるかをさぐっていく『ポストコロニアル国家と言語』（以上、三元社）等で、緻密な調査と鋭い分析を見せる。

Bu tubaab bi jaaxlee ba jaaxle / Dafa ni ko Bamba mu nekkoon
Mbacke / Mu ne ko yaa newoon doo tooñ sa boroom te doo
tooñ sa moroom / Te waxtu julli jot na / Soo julliwul waxtu wi
dinga tooñ sa boroom / Te soo jullie sunu biir gaal dinga ñu tooñ
/ Bamba sànni der ba gééji / Tubaab ba jàq

(困った白人はバンバに言った。お前は神に背くことはない、隣人に背くこともないと言った。祈りの時間だが、お前が祈らなければ神に背くことになり、この船のなかで祈ればわれわれに背くことになる。するとバンバは敷物を海に投げて祈った。白人は呆然とした)

西アフリカ、セネガルが生んだ世界的ポップスター、ユッサー・ンドゥールが1994年に発表したアルバム『ウォンマット Wommat (ウォロフ語で「導き手」の意)』に収録された「マーム・バンバ Mame Bamba (バンバ老師)」の冒頭の一節です。ユッサー・ンドゥールは「ンバラッハ」というセネガル独特のリズムを世界に知らしめたミュージシャンで、1990年代以降、世界的に知られるようになってからはフランス語や英語でも歌いますが、いまでも多くの歌をウォロフ語で歌っています。身近なところでは、日本語版をスタジオジブリが提供して話題を呼んだアニメ映画『キリクと魔女』の音楽を担当しており、彼の楽曲のいくつかはYouTubeで視聴することもできます。セネガルでは、セレール語、ブラール語、マンディンカ語、ソニンケ語など、多くの言語が話されていますが、ウォロフ語は、大多数の人に理解されるセネガルの事実上の共通語となっている言語です。

マーム・バンバとは、セネガル独自のイスラーム教団であるムリッド教団の創始者アフマド・バンバのことです。19世紀末、フランス人が植民地支配者として進出し、旧来の王国秩序が崩壊していくなかで、新しい精神的価値の拠り所としてイスラームが民衆の心をとらえました。そのなかでバンバのムリッド教団は急速に勢力を拡大しましたが、フランスは彼のカリスマを恐れ、遠いガボンに流刑にしました。しかしそのことは逆にバンバを、植民地権力に迫害されながら自らの迫害者をさえ畏怖させる力をもった聖人として、セネガル人の反植民地意識の象徴とすることになりました。

バンバが教えを説いたトゥーバには、その後信者の寄進で巨大なモスクが建てられ、バンバのガボン流刑からの帰還の日を聖なる日として祝う「マガル」という大祭には、毎年数百万の人々が巡礼に集まります。セネガルの人口の90パーセント以上がムスリムですが、ムリッド教団はそのなかでもとくに有力な教団であり、近年、社会のあらゆる分野に強い影響力を持つようになっています。もともとは農民や小商人たちの間に広がった教団だったのですが、近年ではフランス語教育を受けた知識人たちの間でも大きな影響力を持つようになっており、現大統領も信者です。

ここで歌われているのは、バンバが起こしたといわれる数々の奇跡のなかでも最もよく知られているもののひとつです。バンバは流刑のために船に乗せられたのですが、フランス人はバンバに船のなかで祈ることを禁じました。するとバンバは海に投げたゴザの上で平然と祈りを終え、船に戻ってきた、というのです。

「マーム・バンバ」は、とりわけヨーロッパやアメリカなどに移民としてわたったセネガル人たちによって熱狂的に受け入れられました。

それはこの歌が、世界経済の荒波のなかに投げ出されたセネガル人たちの精神の拠り所としての、いわばイスラーム・ウォロフ・アイデンティティとでも言えるものを表現し、鼓舞しているからなのかもしれません。ウォロフ語で歌われる冒頭の一節に続くのは、次のような英語の歌詞です。

「あなたの言葉が広がるまで、あなたが何者だったのか私たちは知らなかった。しかしいま、あなたの民の物語は大きな声で語ることができる。追放の旅のなかのあなたの苦しみ、あなたの悲しみ、神と人間の物語、あなたの祈り、わたしたちの祈り、それが聞きとどけられぬことはありません。あなたに対する信仰のおかげでこの狂った世の中でも生き抜いていける。いま私はどこへでも行ける、あなたがいらっしやることを知っているからです。あなたの苦難が私たちを強くするのです」

ユッサー・ンドゥールは、同胞の信仰を、誇り高く、世界に対して示しているのです。

ところで、「文学」とはなんでしょうか。もちろん、さまざまならえ方がありますが、「フランス文学」や「日本文学」など、国名や民族名を冠した「〇〇文学」という枠組みは、人々に「ある同じ文化伝統に所属している」という共通のアイデンティティを作り出す上で大きな役割を果たしたものでした。ある国の言語が標準化され、書き言葉として普及するとともに、その言語で書かれた文学が成立することによって、広く共通の「国民」としてのアイデンティティが形成されていく、ということは、ベネディクト・アンダーソンという研究者が『想像の共同体』という本で示したことで、**「国語」と「(国民)文学」**の成立は、近代の「国民国家」形成過程で重要な意味を持つ出来事だったのです。たとえば、日本の「国語」「国文学」というのも、明治の近代化の過程で、当時の西欧列強の「国語」と「(国民)文学」に学びながら作り上げられたものでした。

しかし、セネガルなどのアフリカ諸国の場合は、植民地支配から独立した時、英語やフランス語など植民地支配者の言語をそのまま公用語としたため、自分たちの言語を「国語」として育て「文学」を作り出すという事は行われませんでした。セネガルでは、行政や教育などの公的制度のなかで使用される言語はあくまでもフランス語です。そして生み出された文学もフランス語による文学だったのです。それまたしかにセネガル人による文学表現であることは間違いのないのですが、フランス語を理解しない大多数の民衆にとっては縁遠い「外国語文学」にすぎません。

それに対して、民衆の間に深く根を下ろし、強固な共感の回路を作り上げているのが、ウォロフ語を通して受け継がれてきた独自のイスラームの信仰です。信徒の集まりでは、ハサイドと呼ばれるウォロフ語やアラビア語の宗教詩が独特の抑揚で朗唱され、皆が唱和します。人々の日常のなかに重要な位置を占めているのはそうしたオーラルな文化なのです。ウォロフ語を話すムリッド信者にとっては、歌い上げられる宗教詩や伝承こそが、同じ共同体に属しているという意識を与えてくれるとともに、心の癒しと励ましを与えてくれる「文学」なのです。ウォロフ語は、フランス語や日本語のように「国語」としては整備されてはならず、書かれた「文学」もほとんど存在しませんが、ウォロフ語で歌われるユッサー・ンドゥールの歌は、そうした意味で、セネガルの「国民文学」のひとつと言えるでしょう。♪

※国際 SIL のデータベース「エスノローグ Ethnologue」ウェブ版 (16版、2009年) による全世界で現在話されている言語の数。

この連載では、毎月、執筆者が変わり、世界の言語と文学を紹介していきます。



¥0